

授業科目名：コミュニケーション理論	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：宮原 哲、 清宮 徹
		担当形態：クラス分け・単独	
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
理論化もシンボル活動（コミュニケーション）の一環という前提の下、「コミュニケーションに関するコミュニケーション活動」としてのコミュニケーション理論を学習する。この授業を履修し、合格することは次の目標を達成することを意味する。①シンボルとシンボル活動の本質を理解し、②周囲のさまざまなコミュニケーションを批判的精神で観察、解釈し、③自分自身のコミュニケーション行動に適用し、さらにコミュニケーション行動としての理論化を目指す。			
授業の概要			
グローバル・コミュニケーション・プログラム(GCS)の中核的な科目であり、コミュニケーション学の基礎的な理論を、幅広く体系的に理解することを目的とする。対人、グループ、組織、社会の人間関係のレベルにおける主要なコミュニケーション理論から、多文化社会や医療、教育、ビジネス、マス・メディアなどのコンテキストにおける理論まで概観する。また、コミュニケーション理論を基礎づけるメタ理論つまり社会科学の基礎理論の理解を促す。現代の複雑な社会現象を読み解き、問題を解決していく理論の有効性を考察する。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション、「シンボル」の特性について理解する			
第2回：理論と研究の相互関係を理解し、既存の理論を学習するための基礎を築く			
第3回：研究の根底にある代表的な哲学（実証主義、解釈主義など）について考察する			
第4回：代表的理論の解釈をする：Social Penetration Theory			
第5回：代表的理論の解釈をする：Cognitive Dissonance Theory			
第6回：代表的理論の解釈をする：Coordinated Management of Meaning			
第7回：代表的理論の解釈をする：Symbolic Interactionism			
第8回：代表的理論の解釈をする：Small Group Communication Theories			
第9回：代表的理論の解釈をする：Conflict Management and Face Negotiation Theories			
第10回：代表的理論の解釈をする：Communication Accommodation Theory			
第11回：コミュニケーション・コンテキストに理論を適用する：Family			
第12回：コミュニケーション・コンテキストに理論を適用する：Friendship			
第13回：コミュニケーション・コンテキストに理論を適用する：Group			
第14回：コミュニケーション・コンテキストに理論を適用する：異文化			

定期試験は実施しない
テキスト Griffin, E., Ledbetter, A., & Sparks, G. (2019). <i>A first look at communication theory</i>. McGraw-Hill Education.
参考書・参考資料等 ICA(International Communication), NCA(National Communication Association), 日本コミュニケーション学会などが発行するコミュニケーション理論・研究の最先端の学会誌、<i>Communication Theory</i> などを適宜指定し参考文献とする
学生に対する評価 理論レポート・口頭発表・・・・・・・・・・・・・50% リサーチ・プロポーザル・・・・・・・・・・・・・50%

授業科目名：対人コミュニケーション研究	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：宮原 哲 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
対人関係とコミュニケーションとの相互の影響について、批判的で建設的な観察、意味づけ、理解、解釈ができるようになることを目指す。この授業を履修、合格した結果、①基本的な対人コミュニケーション論の主旨を理解し、②理論を用いて自分自身を含む対人行動の体系的な観察、解釈ができ、③実際のコミュニケーション行動を提示したり、実践したりできる。			
授業の概要			
コミュニケーションの最も基本的な単位であり、シンボル活動の「産物」である一対一の人間関係の特性を学び、豊かな人間関係を営むのに必要な知識、動機、スキルを習得させる。親子、兄弟姉妹、教師と生徒、医師と患者など一対一のコミュニケーションは、生活のさまざまな場面で満足いく社会生活を送る重要なカギを握っているプロセスであることを理解する。また自己開示、説得、アイデンティティ形成、対立、問題解決など、すべてのコミュニケーションの場面でその特性や問題点を理解するために必要な基本的なコミュニケーション概念を理解し、研究や実践に結び付ける。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション、課題説明、および人間のコミュニケーションに関する基本的概念			
第2回：対人コミュニケーションの基礎概念と状況別考察			
第3回：対人コミュニケーションにおける言語の特性と問題点			
第4回：対人コミュニケーションにおける非言語の特性と問題点			
第5回：シンボル活動としての認識の本質			
第6回：「聞く」と「聴く」の関係と相違			
第7回：説得：人を動かす（影響を与える）コミュニケーションについて			
第8回：日本的対人コミュニケーションの特徴と異文化比較：言語・非言語			
第9回：日本的対人コミュニケーションの特徴と異文化比較：認識・説得			
第10回：特定の対人関係とコミュニケーション：家族			
第11回：特定の対人関係とコミュニケーション：友人・恋人			
第12回：特定の対人関係とコミュニケーション：グループ・組織			
第13回：特定の対人関係とコミュニケーション：異文化			
第14回：特定の対人関係とコミュニケーション：医療・介護			
定期試験は実施しない			
テキスト			

- ① 宮原哲 2006 新版・入門コミュニケーション論 松柏社
- ② Trenholm, S. & Jensen, A. (2013). *Interpersonal communication*. Oxford University Press.

参考書・参考資料等

日本国内外のコミュニケーション学会誌（日本コミュニケーション研究、*Human Communication Research*, *Communication Monographs*など）を適宜指定する。

学生に対する評価

対人コミュニケーション理論の研究・レポートと発表・・・・・・・・・・30%

対人コミュニケーションの問題点を選択し先行研究調査レポート・・・・・・・・40%

リサーチ・デザイン作成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30%

授業科目名：組織コミュニケーション研究	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：清宮 徹、 K. バークレー
			担当形態：オムニバス
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
企業や学校、病院などの組織レベルのコミュニケーション過程を理解し、諸問題の解決や組織の発展・変革に貢献する理論的かつ実践的知識を習得する。			
授業の概要			
組織の内部と外部のコミュニケーションに分け、前者は組織内の人間関係を中心に組織の健全運営を研究する。後者では、組織が発信する多様なメッセージを考察し、組織の信頼性やブランド力を高める実践的な知を探究する。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション：組織コミュニケーションとは—その地平とスコープ（清宮 徹）			
第2回：組織文化論：文化的アプローチによる組織の分析（清宮 徹）			
第3回：組織ディスコース研究：ディスコースの視座を組織コミュニケーションに（清宮 徹）			
第4回：組織アイデンティティとアイデンティフィケーション（清宮 徹）			
第5回：組織におけるジェンダーとセクシャリティ（清宮 徹）			
第6回：組織とパワー、抵抗：組織の変革は可能か（清宮 徹）			
第7回：現代社会における組織の情報発信とメッセージ戦略（清宮 徹）			
第8回：組織レトリック：古典的レトリック理論とレトリック状況（清宮 徹）			
第9回：レトリック分析の方法：評価分析と批判分析（清宮 徹）			
第10回：企業の情報発信：コーポレートコミュニケーション（K. バークレー）			
第11回：ステークホルダーのコミュニケーション（K. バークレー）			
第12回：コーポレート・アイデンティティとレピュテーション（K. バークレー）			
第13回：リスクマネジメントとクライシス・コミュニケーション（K. バークレー）			
第14回：コーポレートコミュニケーションの異文化的視点（K. バークレー）			
定期試験は実施しない			
テキスト			
① 清宮 徹（2019）『組織のディスコースとコミュニケーション』同文館書店			
② Hoffman, M. F. & Ford, D. J. (2010). <i>Organizational Rhetoric</i> . Sage Publication			
参考書・参考資料等			
Mumby, D. K. (2013). <i>Organizational Communication: A Critical Approach</i> . Thousand Oaks, CA; SAGE Publications			

学生に対する評価

レポート（70%）； プレゼンテーション（30%）

授業科目名：異文化コミュニケーション研究	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：初見かおり、 K. バークレー 担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
<ダイバーシティな環境におけるスキルや知見を発展させること> ・異文化コミュニケーションに関する基本的な理論を学び、この分野の語彙・概念を習得する。 ・教育現場や医療現場における異文化コミュニケーションの民族誌を通して具体的事例を学ぶ。 (例：アメリカの学校教育とインディアン居留地の子どもたち、エルサルバドルの難民とアメリカの精神医療) ・文化的なステレオタイプや偏見、エスノセントリズムについて内省的なエスノグラフィーを作成する(reflective essay)。			
授業の概要			
異文化コミュニケーションに関する基本的な理論を学び、多文化社会に関する諸問題を考察する。文化的背景が異なる者同士が関わり、人間関係を発展させたり、対立を生じたりするコミュニケーション過程を理解する。教育現場や職場におけるダイバーシティ・トレーニングは、これからますます重要となる。文化的なステレオタイプや偏見、エスノセントリズムに対する自覚など、ダイバーシティな環境におけるスキルや知見を発展させる。また異文化的環境における諸問題に学術的に取り組み、新たな知見の開発を目指す。文化は後天的に学習するものであり、知らず知らずのうちに世代間で共有され、受け継がれ、さらに行動・思考様式の枠組みを形成するという理解の下、広義の異文化として、地域、性別、年齢などによって生成される「常識」がもたらす問題に注目し、日常の人間関係においても異文化の要素に対して敏感に知識や認識力を向上させる。			
授業計画			
第1回：ハビトゥス (habitus) (Pierre Bourdieu. 2004. "The Peasant and His Body." <i>Ethnography</i> . [Recommended reading: Pierre Bourdieu. 1998. "Is a Disinterested Act Possible?" In <i>Practical Reason</i> .])			
第2回：植民地主義 (Franz Fanon. 1967. "The Negro and Language." In <i>Black Skin, White Masks</i> , pp. 17-40.)			
第3回：人種差別 (James Baldwin. 1998. "Notes of a Native Son [1949]." In <i>James Baldwin: Collected Essays</i> , pp. 63-84.)			
第4回：ポリティカル・エコノミー (E. E. Evans-Pritchard. 1963[1940]. "Time and Space." In <i>The Nuer</i> .)			

第5回：ポリティカル・エコノミー (David Harvey. 1989. "From Fordism to Flexible Accumulation."
" In *The Condition of Post-modernity*. [Recommended reading: "Fordism."])

第6回：社会的行為 (Max Weber. 1968. "Basic Sociological Terms." In *Economy and Society*, pp.
22-40.)

第7回：スピーチ・コミュニティ(ことばの共同体) (John J. Gumperz. "1 The Speech Community."
" In *Linguistic Anthropology A Reader*. [Recommended readings: Emile Durkheim. 1982.
"What is a Social Fact" & "Rules for the Distinction of the Normal from the
Pathological." In *Rules for Sociological Method*, pp. 50-59 & 85-107.])

第8回：スピーチ・コミュニティ(ことばの共同体) (Marcylina Morgan. "2 The African-American
Speech Community: Reality and Sociolinguists." In *Linguistic Anthropology A Reader*.)

第9回：スピーチ・コミュニティ(ことばの共同体) (Jane H. Hill. "20 Language, Race, and
White Public Space." In *Linguistic Anthropology A Reader*.)

第10回：教育現場 (Elinor Ochs and Bambi B. Schieffelin. "12 Language Acquisition and
Socialization: Three Developmental Stories and Their Implications." In *Linguistic
Anthropology A Reader*.)

第11回：教育現場 (Susan U. Philips. "13 Participant Structures and Communicative
Competence: Warm Springs Children in Community and Classroom." In *Linguistic
Anthropology A Reader*.)

第12回：教育現場 (Shirley Brice Heath. "14 What No Bedtime Story Means: Narrative Skills
at Home and School." In *Linguistic Anthropology A Reader*.)

第13回：医療現場 (Psychosis, Psychopharmacology, and Families) (Janis H. Jenkins.
"Introduction, Ch 1 & 2." In *Extraordinary Conditions*.)

第14回：医療現場 (Violence, Trauma, and Depression) (Janis H. Jenkins. "Ch 3 & 4." In
Extraordinary Conditions.)

定期試験は実施しない

テキスト

- Alessandro Duranti (ed.). 2009. *Linguistic Anthropology A Reader*. Edition 2. Blackwell Publishing.
- Jenkins H. Jenkins. 2020[2015]. *Extraordinary Conditions: Culture and Experience in Mental Illness*. University of California Press.

参考書・参考資料等

- Emile Durkheim. 1982. "What is a Social Fact" & "Rules for the Distinction of the Normal from the Pathological." In *Rules for Sociological Method*, pp. 50-59 & 85-107.
- Max Weber. 1968. "Basic Sociological Terms." In *Economy and Society*, pp. 22-40.
- E. E. Evans-Pritchard. 1963[1940]. The Nuer.
- David Harvey. 1989. *The Condition of Post-modernity*

- Pierre Bourdieu. 1998. “Is a Disinterested Act Possible?” *In Practical Reason*.

学生に対する評価

- 異文化コミュニケーションに関する基本的な理論について学び、この分野の語彙・概念を習得することができた。
- 教育現場や医療現場における異文化コミュニケーションの具体的事例の学びを発展させ、文化的なステレオタイプや偏見、エスノセントリズムについて内省的なエスノグラフィーを作成することができた(reflective essay)。

授業科目名：メディアコミュニケーション研究		教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： ドゥエン　オルソン
				担当形態：単独
科　目		教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校　英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等		教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標 メディアリテラシーを身につけることを目標とし、そのために多数のメディアメッセージを取り上げて分析を行う。				
授業の概要 インターネットやスマートフォンの無い日常生活は、もはや考えられない時代となった。メディアは、歴史的に新聞、電話、テレビ、インターネット、SNSなど多様な形で発展してきた。メディアの社会的影響と効果は重要な研究領域となった。広告を含め、メッセージやスピーチがどのように社会的に拡散し受容されたか、メディアと権力、社会の変化について理解を深めていく。コミュニケーション理論に基づいてマス・メディアに関連する諸問題を検討し、メディア全般に対して批判的に理解できる能力を育成する。				
第1回：メディアの発展と社会の変化 第2回：社会の変化に伴うメディアの使用法変化 第3回：初期の広告の役割 第4回：現代の広告・宣伝の役割 第5回：インターネット上の宣伝技術 第6回：初期のニュースメディア 第7回：近代のニュースメディア 第8回：インターネットとニュースメディアの変化 第9回：メディアと政治 第10回：SNSその他の社会的役割 第11回：フェークニュースの普及過程 第12回：メディアの影響力研究：行動に対する研究 第13回：メディアの影響力研究：世論・社会思想に対する研究 第14回：メディアのこれから発展と展望 定期試験は実施しない				
テキスト 学内のe-learningシステムMoodleに随時資料を掲載する				
参考書・参考資料等 <i>Media and Society: A Critical Perspective</i> (Berger)；				

Media Now: Understanding Media, Culture, and Technology (Strauber/LaRose/Davenport)

学生に対する評価

各自のメディアについての研究論文の内容を評価する。

授業科目名：コミュニケーション能力	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：宮原 哲 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標 「コミュニケーション能力」が何を指すのか理解し、知識・動機・スキルの組み合わせとしての能力の習得を目指す。この授業を履修し、合格することは①人間のシンボル活動としてのコミュニケーション力の本質を理解し、②自分自身のコミュニケーション能力の現状と課題を正確に観察・評価し、③能力向上にむけて実践的な努力をすることができることを意味する。			
授業の概要 現代社会の複雑な問題を解決できるコミュニケーションとは何か、多面的な視座から学ぶことを目的とする。とくにグローバル社会で活躍できるコミュニケーション力が、どのように効果的に形成されるか、教育現場や多様なコンテキストにおける能力開発について研究する。とくに多文化社会のなかで多様性を尊重する能力がより一層求められ、問題解決を積極的また建設的に行えるコミュニケーション能力を習得する。プレゼンテーションやディスカッション能力に加えて、豊かな人間関係を築き、家庭や学校、職場における良好な関係の維持、発展させるコミュニケーション能力の構築を考察する。			
授業計画 第1回：オリエンテーション、およびシンボル活動の本質・課題について 第2回：コミュニケーション能力（competence）の基礎を理解する 第3回：「発信力」：言語・非言語メッセージを適切、正確に選択し相手に伝える 第4回：「認識力」：相手からのメッセージ、周囲の状況を適切、正確に観察、解釈、判断する 第5回：「役割力」：相手との関係に関するコミュニケーション能力について理解する 第6回：「目的力」：個人内・対人関係において「何のため」の側面を考察する 第7回：「自己力」：自分を知り、相手に伝えるための能力について理解する 第8回：メディアとコミュニケーション能力：賢い使い方、メディア・リテラシーについて考察する 第9回：「日本的コミュニケーション能力」について考えることの意義を理解する 第10回：日本的コミュニケーションの特徴：発信力 第11回：日本的コミュニケーションの特徴：認識力 第12回：日本的コミュニケーションの特徴：役割力 第13回：日本的コミュニケーションの特徴：目的力 第14回：日本的コミュニケーションの特徴：自己力 定期試験は実施しない			
テキスト			

Wood, J. T. (2020). *Interpersonal communication: Everyday encounters*. Cengage Learning

参考書・参考資料等

宮原哲 2006 新版・入門コミュニケーション論 松柏社

その他、最先端の研究論文を適宜指定し、参考文献とする

学生に対する評価

自己モニターレポート・・・・・・・・・・・・・・・・・・15%

コミュニケーション学領域文献調査レポート・・・・・・・・・・15%

理論・概念に関する口頭発表・・・・・・・・・・・・・・・・・・15%

コミュニケーション能力リサーチレポート・・・・・・・・・・30%

コミュニケーション・コンサルティング・プロジェクト・・・・・・・・25%

授業科目名：リーダーシップ と集団コミュニケーション	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2 単位	担当教員名：清宮 徹 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標 的確な状況判断ができ、有効な問題解決やチームワークの質的向上、交渉のスキルを持った総合的なリーダーシップの開発を目指す。			
授業の概要 グループにおける複雑なコミュニケーション問題を考えると同時に、意思決定や交渉、チームワークやリーダーシップについての実践的スキルも学ぶ。			
授業計画 第1回：オリエンテーション：グループコミュニケーションとは 第2回：グループ内の人間関係発展 第3回：グループメンバーとチームワーク 第4回：効果的なチーム形成 第5回：伝統的リーダーシップ理論 第6回：リーダーとフォロワーのダイナミックな関係 第7回：傾聴とリーダーシップ・スキル 第8回：グループコミュニケーションにおける非言語の役割 第9回：問題解決の方法 第10回：意思決定の進め方 第11回：議論・ディベートによる問題解決 第12回：グループにおけるコンフリクト 第13回：さまざまなコンフリクト 第14回：交渉の理論とスキル 定期試験は実施しない			
テキスト Hersted, L. and Gergen, K. J. (2013). <i>Relational Leading</i> : Taos Institute Engleberg, I. & Wynn, D. (2013). <i>Working in Groups</i> . Pearson Education			
参考書・参考資料等 特になし			
学生に対する評価 インタビュー調査レポート（70%）； プレゼンテーション（30%）			

授業科目名：対立と交渉	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：宮原 哲、 清宮 徹
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
人間関係での対立を中立な立場でとらえ、交渉を経て建設的なコミュニケーションとするために必要な理論・概念の理解を築き、実践的能力を習得する。この授業を履修し、合格することは次の目標に到達したことを意味する。①対立を人間のシンボル活動の一環として理解し、②周囲で起こる潜在的なものも含めた対立を批判的に観察、解釈し、③建設的な対立への対応策を講じ、実践する。			
授業の概要			
社会関係や人間関係において、対立(コンフリクト)は常に発生し、時に大きく顕在化する。それは友人や恋人、夫婦などの対人関係だけではなく、職場のグループ、組織の内部対立、組織間対立、社会や国際関係上の対立など、人間関係のあらゆるレベルにおいて重要な課題である。多様な形態を持つコンフリクトが、特定の人間関係や社会関係の関係性の中で、どのように形成され発展するかを理解する。人間関係を悪化させるような非建設的対立から、問題解決のための建設的対立に移行するスキルを習得する。対立を解決するための有効な方法である交渉について、理論だけでなく実践的な交渉スキルを、交渉ゲームや事例学習などを通じて学ぶ。ビジネスやセールスの交渉なども実践しながら、勝つための交渉ではなく、ウィンウィンを目指した問題解決の交渉を習得する。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション、人間のシンボル活動の基本的原則の理解			
第2回：「対立」のとらえ方に関する日本と欧米との相違について議論する			
第3回：対立が避けられる傾向が強い日本文化のコミュニケーションに関する規範を学習する			
第4回：欧米で対立がどのように理解、解釈されてきたか探求する			
第5回：交渉のシンボル活動としての特色と課題を学習する			
第6回：交渉のコンテキスト：商取引			
第7回：交渉のコンテキスト：政治			
第8回：交渉のコンテキスト：家庭			
第9回：交渉のコンテキスト：文化			
第10回：「説得」は説得者と被説得者の相互交渉であることを理解する			
第11回：説得に関する理論、概念を学習する			
第12回：対立処理の方法について議論する			

第13回：効果的対立処理への状況による影響を考える

第14回：対立処理実践：グループ活動

定期試験は実施しない

テキスト

Hocker, J. L. & Wilmot, W. W. (2014). *Interpersonal conflict*. New York, NY: McGraw Hill.

参考書・参考資料等

Dai, X. & Chen, G. M. (Eds). (2022). *Conflict management and intercultural communication*. New York, NY: Routledge.

学生に対する評価

理論レポート・・・・・・・・・・・・・・・・・・15%

口頭発表・・・・・・・・・・・・・・・・・・15%

対立場面シミュレーション・プレゼンテーション・・・・・・30%

研究企画書レポート・・・・・・・・・・・・・・・・・・40%

授業科目名：国際社会と地域	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：山元 里美、 初見 かおり
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標 この授業の到達目標はグローバル問題をクリティカルな視点からひも解く方法を学ぶことで、グローバル化社会で生き抜くための批判的思考力を高めることである。			
授業の概要 本授業では北アメリカ、南アメリカ、アジア圏、中近東、アフリカの事例を交差性(intersectionality)の観点から考察した上で、日本社会に応用できるかを考察する。			
授業計画 第1回：イントロダクション 第2回：交差性とクリティカル手法ー理論的枠組みを学ぶ 第3回：「交差性」という概念の構築過程を学ぶ 第4回：事例 1（カナダ）：移民介護士の団結にみられる交差性の分析 第5回：事例 2（アメリカ）：社会運動を交差性から分析する 第6回：事例 3（アルゼンチン）：ラテンアメリカの資本主義の基盤を学ぶ 第7回：事例 4（ブラジル）：高等教育機関にみられるポピュリズムからの復活を分析する 第8回：事例 5（南アフリカ）：南アフリカの高等教育機関の今後の可能性と展望を分析する 第9回：事例 6（トルコ）：COVID-19の下の中間層の消費傾向を分析する 第10回：事例 7（インド）：都市部にみられる介護労働に対するスティグマを分析する 第11回：事例 8（ザンビア）：COVID-19で露わになった社会格差を分析する 第12回：ハイパー・グローバリゼーションを考察する 第13回：ハイパー・グローバリゼーションから持続可能な協力関係への可能性を考察する 第14回：まとめ 定期試験は実施しない			
テキスト Global Dialogue（International Sociological Association, Sage Publication）			
参考書・参考資料等 テキストの補助教材は適宜、Moodleに掲示するので、全て読んでから授業に臨むこと。			
学生に対する評価 リアクションペーパー（12回分 70%）及びファイナルエッセー（30%）で評価する。			

授業科目名： 国際社会と平和	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2 単位	担当教員名：山元 里美、 初見 かおり
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
本授業のテーマは「クリティカルな視点から平和教育の実践現場を考察する」ことである。具体的には、Journal of Peace Educationに掲載された原著論文を精読することで海外での取り組みと失敗を学ぶことで、日本社会への応用の可能性について議論する。			
授業の概要			
現在、平和的解決策を見出すことが困難な紛争地域が多々ある。国連は平和構築に取り組んでいるが、国家レベルではなく個人レベルでも世界平和を体系的・実践的に学ぶことが肝要であり平和教育はその一環である。本授業では、平和教育分野の概要を学んだあと実践事例を読み、日本における平和教育について議論する。			
授業計画			
第1回：イントロダクション			
第2回：現場の記述から学ぶ平和構築の手法を学ぶ			
第3回：中近東の事例：異なる宗派・宗教・信仰の交差性を探る			
第4回：批判的平和教育の政治性を学ぶ			
第5回：批判的平和教育の政治性を踏まえた上でその実用性と可能性を考察する			
第6回：平和教育とトラウマの克服との関係を学ぶ			
第7回：忘れたくても忘れられない過去との向き合い方ー教室でのディベートの役割を学ぶ			
第8回：マイノリティの自助力を育む取り組みについて学ぶ			
第9回：「エンパワーメント」プログラムの誤算 について学ぶ			
第10回：批判的平和教育と社会正義ー教師と生徒の関係性の理想的変換について考察する			
第11回：ヌスバウムの文献を取り上げて平和教育の哲学的基盤を考察する			
第12回：センの文献を取り上げて平和教育の哲学的基盤を考察する			
第13回：ヌスバウムとセンの哲学的立場を踏まえてフレイレの社会性議論を考察する			
第14回：まとめ			
定期試験は実施しない			
テキスト			
Journal of Peace Educationに掲載された論文をMoodleにアップする。			
参考書・参考資料等			
随時掲示する。			

学生に対する評価

リアクション・ペーパー（12回分で70%）とファイナルエッセー（30%）

授業科目名：国際社会とジェンダー	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：初見 かおり 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
＜ジェンダー問題をローカルなコンテキストに沿って考察し、構造的な理解を図る＞ ・具体的なジェンダー問題を、ローカルなコンテキストに沿って考察する。（インド、アメリカ・ニューメキシコ州、日本） ・歴史的・文化的な背景を考慮しながら、コロニアリズムと人種、宗教とカースト、構造的暴力と貧困、ケアなどの複数の関連要素を考察する。 ・ジェンダー問題を克服する実践的な学びや理論的發展を探究する。			
授業の概要			
国際社会においてジェンダー問題は主要な課題となっており、SDGsの中でもその重要性が示されている。日本においては極めて深刻であり、多面的な視座からこの課題解決に取り組まねばならない。日本及び世界のジェンダー問題を、単に女性の問題とするのではなく、性的マイノリティを含めたより広い問題として研究する。人種とジェンダーなど関係性が交差する場面にも焦点を当て、差別や偏見、そして暴力や貧困との関係などの実態を理解する。国際社会の問題を視野に入れながら、具体的なジェンダー問題を、ローカルなコンテキストに沿って理解する。男女二項対立的把握を乗り越え、ジェンダー問題を克服する実践的な学びを重視する。さらに文化や歴史的な背景を考慮しながら、ジェンダー問題の構造的な理解や理論的發展を考察する。			
授業計画			
第1回：性的マイノリティ：スティグマ・貧困・マージナリティ（Serena Nanda, "9 Life on the Margins: A Hijura's Story. and Gayatri Reddy, "10 Crossing 'Lines' of Difference: Transnational Movements and Sexual Subjectivities in Hyderabad, India." In <i>Everyday Life in South Asia</i>.) 第2回：女性と心身と貧困（Sabina F. Rashid, "14 Weakness, Worry Illness, and Poverty in the Slums of Dhaka." In <i>Everyday Life in South Asia</i>.) 第3回：ジェンダーと暴力（Kalyani D. Menon, "25 Living and Dying for Mother India: Hindu Nationalist Female Renouncers and Sacred Duty." In <i>Everyday Life in South Asia</i>.) 第4回：人種とコロニアリズム（"1. Graveyard," "2. The Elegiac Addict." In Garcia, <i>The Pastoral Clinic</i>.) 第5回：差別と偏見（"3. Blood Relative," "4. Suicide as a Form of Life." In Garcia, <i>The Pastoral Clinic</i>.)			

第6回：ジェンダーとケアと麻薬取締法（“5. Experiments with Care,” “Conclusion: A New Season.”）In Garcia, *The Pastoral Clinic*.)

第7回：日本的親密性のポリティカル・エコノミー（アレクシー，第1章 終わりの始まり）

第8回：協議の構造（アレクシー，第2～3章 法的解決）

第9回：日本で広がる不平等（アレクシー，第4～5章 離婚のコスト）

第10回：現代日本とつながり（アレクシー，第6章 別れた人たちのきずな）

第11回：第三世界と女性、コロニアリズム（アルンダティ ロイ，第1～5章）

第12回：人種、カースト・エリート（アルンダティ ロイ，第6～10章）

第13回：離婚差別と偏見（アルンダティ ロイ，第11～15章）

第14回：母であること、女であること（アルンダティ ロイ，第16～最終章）

定期試験は実施しない

テキスト

- ・Garcia, Angela. 2010. *The Pastoral Clinic: Addiction and Dispossession along the Rio Grande*. Berkeley: University of California Press.
- ・アリソン・アレクシー(濱野健 訳). 2022. *離婚の文化人類学: 現代日本における<親密な>別れ方*. みすず書房.
- ・Roy, Arundhati. 2017[1997]. *The God of Small Things*. London: 4th Estate. (アルンダティ ロイ (工藤 惺文 訳). 1998. *小さきものたちの神*. DHC.)

参考書・参考資料等

- ・Mines, Diane P. and Sarah Lamb (ed.). 2010. *Everyday Life in South Asia*. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press.

学生に対する評価

- ・男女二項対立的把握を越えた、ジェンダー問題の構造的な理解ができている。
- ・ジェンダー問題をローカルなコンテキストに沿って考察し、それぞれの事例の歴史的・文化的な背景を考慮することができている。
- ・ジェンダー問題を克服する実践的な学びや理論的發展を探究できている。

授業科目名：英語統語論・形態論	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：谷川 晋一、 中西 弘
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
動詞句（VP）と左周辺部に焦点を当てながら、英語の統語構造と形態について理解を深める。本科目を通して、（i）英語における統語構造の組み上げ方を理解する、（ii）統語、形態、意味の接点に注目しながら、英語の主要構文の構造と派生を理解する、の2点が達成できることを目指す。			
授業の概要			
英語の動詞句（VP）と左周辺部に焦点を絞り、生成統語理論に沿って、いかにして統語構造を組み上げるか、いかにして文を派生させるかについて理解を深める。意味の側面にも焦点を当てることで、統語、形態、意味、3つの領域の接点を意識しながら、英語の構造と形態について深い探究を行う。前半部では、動詞句の構造に的を絞った上で、非対格・非能格動詞等も深く関わる構文と現象への接近法を考察する。後半部では、一致や屈折等の形態的な特性が、生成統語理論の枠内で、どのように扱えるかを見た後、主語よりも上位の位置である左周辺部への移動（A'移動）が関与する構文と現象への接近法を考察する。			
授業計画			
第1回： 統語構造と意味役割			
第2回： 項構造とVP内主語仮説			
第3回： 非対格・非能格動詞のVP構造			
第4回： VP殻構造と二重目的語構文			
第5回： There構文と場所句倒置構文			
第6回： 結果構文と外置構文			
第7回： Way構文と同族目的語構文			
第8回： 動詞・助動詞の形態と構造			
第9回： 格，一致，助詞			
第10回： 屈折と縮約			
第11回： Wh疑問文と左周辺部			
第12回： 話題化構文と焦点化構文			
第13回： 情報構造と多重CP構造			
第14回： まとめ			
定期試験は実施しない			

テキスト
特定のテキストは使用せず，ハンドアウト等の配布資料によって行う。
参考書・参考資料等
<i>Minimalist Syntax</i> , ed. by Andrew Radford, Cambridge University Press. 『最新英語構文事典』 中島平三編 大修館書店. 『英語の主要構文』 中村捷・金子義明編 研究社.
学生に対する評価
授業への積極的参加20%，課題への取り組み40%，期末レポート40%

授業科目名：英語意味論・語用論	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：谷川 晋一、 中西 弘 担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
動詞に関わる言語事実や現象に焦点を当てながら、英語を意味論と語用論の側面から考察する。本科目を通して、(i) 英語という言葉が持つ意味的な特性を理解する、(ii) 英語における意味と文法の接点を理解する、の2点が達成できることを目指す。			
授業の概要			
動詞に関わる言語事実や現象に焦点を絞り、英語を意味論と語用論の観点から考察する。適宜、日本語との対照を行い、意味に関わる事実と現象を文法形式と絡めながら議論することで、英語という言葉が持つ特性の理解を深化させる。前半部分では、類型論や文化研究の側面を考慮に入れながら、世界の諸言語の中で英語がどのように位置付けられるかを見る。中盤部分では、アスペクト、交替、補部の形式といった文法に密接に関わる側面に目を向けることで、そのような文法形式がどのような意味に結びつくのかを見る。後半部分では、結果構文をはじめとする複数の構文に着目した上で、それらの構文に付随する意味的特性を見る。			
授業計画			
第1回： 言語類型論と日英語: 意味機能の標示と情報構造			
第2回： 「する」vs「なる」の日英語対照研究			
第3回： 英語の発想と表現法: 言語文化と語用論			
第4回： 動詞の交替1: 自動詞・他動詞の分類			
第5回： 動詞の交替2: 使役性と自他交替			
第6回： アスペクト意味論1: 事象の捉え方とアスペクト			
第7回： アスペクト意味論2: アスペクトと動詞分類			
第8回： 動詞の補部の形と意味1: 叙実性と補文標識			
第9回： 動詞の補部の形と意味2: 思考と従属節の形式			
第10回： 日英語の結果構文			
第11回： 日英語の二重目的語構文			
第12回： 日英語の受身文			
第13回： 日英語の提示文			
第14回： まとめ			
定期試験は実施しない			
テキスト			

特定のテキストは使用せず，ハンドアウト等の配布資料によって行う。

参考書・参考資料等

『点と線の言語学：言語類型から見えた日本語の本質』 影山太郎著 くろしお出版.

『英語動詞の分類と分析：意味論・語用論によるアプローチ』 吉川洋・友繁義典著 松柏社.

『最新英語構文事典』 中島平三編 大修館書店.

学生に対する評価

授業への積極的参加20%，課題への取り組み40%，期末レポート40%

授業科目名： 英語音声学・音韻論	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：中西 弘 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
英語分節音の発音の仕方について、日本語分節音の調音点・調音法と比較することで理解した上で、繰り返しリスニング・発音練習を行うことで英語音声知覚を向上させる。また、前後の音環境によってどのような音変化が生じるのか観察し、そのメカニズムについて理解できるようになる。さらに、英語のプロソディ（リズム・イントネーションなど）の特徴について解説・演習を行ったうえで、受講者の音声・モデル音声を音響分析し、可視化することで理解を深める。 これらの英語分節音・プロソディの仕組みを十分理解し、音読・シャドーイング・リピーティング練習を繰り返し行うことで、学習者の注意がそれらの音声的側面に十分に向けられ、分節音が知覚されやすくなり、より英語らしいプロソディで発音出来るようになるであろう。さらに、英語のプロソディの仕組みを理解することが、英文理解の促進にもつながる可能性があることを演習により確認する。			
授業の概要			
英語分節音を、MRI動画などの視覚・聴覚資料を活用しつつ、調音点や調音法の解説を行う。また、日本語分節音の調音動画と比較しながら理解を深める。毎回の課題では、受講者に単語・文の音読を録音し、音声ファイルを提出することを求める。受講生の音声とモデル音声を、Praatを用いた音響分析により比較し、自身の英語音声を分析・評価して頂く。さらに、シャドーイングやリピーティングの学習法により、どのような英語音声側面（分節音・プロソディ）に効果を及ぼすのか音響分析により確認する。			
授業計画			
第1回：イントロダクション、調音器官の仕組み、国際音声記号(IPA)について			
第2回：分節音（母音）：前舌・後舌母音の理解と音声知覚・発音練習			
第3回：分節音（母音）：中舌・二重母音の理解と音声知覚・発音練習			
第4回：分節音（子音）：破裂音・摩擦音の理解と音声知覚・発音練習			
第5回：分節音（子音）：破擦音・鼻音・接近音の理解と音声知覚・発音練習			
第6回：プロソディ：音節・アクセントの理解と発音練習			
第7回：プロソディ：音変化・英語リズムの理解と発音練習			
第8回：プロソディ：英語イントネーションの理解と発音練習			
第9回：プロソディが文理解に及ぼす影響について			
第10回：音響分析（1）：Praatによるフォルマント分析			
第11回：音響分析（2）：Praatによるピッチ・インテンシティ・ポーズ分析			
第12回：プロソディシャドーイングが分節音・プロソディ獲得に及ぼす影響			

第13回：コンテンツシャドーイングが分節音・プロソディ獲得に及ぼす影響 第14回：リピーティングが分節音・プロソディ獲得に及ぼす影響 定期試験は実施しない
テキスト 授業中に適宜資料を配布する。
参考書・参考資料等 川越いつえ（2007）英語の音声を科学する 大修館書店
学生に対する評価 授業中の課題（50%）、レポート（50%）

授業科目名：心理言語学	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：中西 弘、 伊藤 彰浩 担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標 （１）英語の理解・獲得の基盤となる記憶システム（主にワーキングメモリ）の仕組みについて理解することが出来る。 （２）日本人英語学習者における文理解プロセスの特徴について理解することが出来る。 （３）上記の知見をもとに英語学習・教育へどのように応用できるか考えることが出来る。			
授業の概要 論文の輪読・解説・ディスカッションを通して、英語母語話者・日本人英語学習者における言語理解の心的メカニズム（主に統語処理プロセス）の一端を解明する。また、その知見を活かし、英語教育への応用可能性について議論する。			
授業計画 第1回：記憶システム：ワーキングメモリ（音韻ループ）とリーディングスパンテスト 第2回：音声・文字の知覚プロセス：音声知覚の運動理論・マガーク効果 第3回：リーディングとリスニングの接点：音韻符号化・韻律構造仮説・チャンキング 第4回：語彙処理プロセス：メンタルレキシコンの仕組み、単語親密度と語彙アクセスの関係 第5回：文理解プロセス（１）：文解析器の仕組み、モジュラーモデルと制約依存モデル 第6回：文理解プロセス（２）：統語処理プロセスにおける意味・文脈情報の役割 第7回：文理解プロセス（３）：統語処理プロセスにおける語彙（下位範疇化情報）の役割 第8回：文理解プロセス（４）：統語処理プロセスにおけるプロソディの役割 第9回：文理解プロセス（５）：個人差要因（ワーキングメモリ容量・習熟度）と統語処理プロセス 第10回：文章理解プロセス：状況モデル構築におけるスキーマ・推論の役割 第11回：言語処理の自動化プロセス（１）：音読・シャドーイング・リピーティングの効果 第12回：言語処理の自動化プロセス（２）：統語的プライミング効果 第13回：注意機能と言語獲得：ワーキングメモリに情報を取り込む仕組み 第14回：第二言語学習者の文理解プロセスの特徴と指導法のまとめ 定期試験は実施しない			
テキスト 授業中に適宜資料を配布する。			
参考書・参考資料等 西原哲雄（編）心理言語学 朝倉書店			

学生に対する評価

課題（50%）、レポート（50%）

授業科目名： 辞書学（英語）	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：中西 弘、 T. トリュベール
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
この授業は、コンピューターによる自動言語処理ツールを用いた辞書学を学生に紹介することを目的とする。辞書学は単語、単語の意味、双方の関係についての研究である。語源、語構造、綴りとその進化そして発音に関する研究である。正確に単語を集めるには、単語の使用法、頻度に関心をもつ必要があり、それを可能にするのが自動言語処理である。このツールは正しい文章を書くだけでなく言語レベルを区別することも可能である。この授業では語彙研究を多角的に検討する（英英、英仏、英西、仏西など）。授業は英語で行う。			
授業の概要			
この授業は毎回、3つのセッションによって構成される：1）各授業のテーマについて学生は前もって準備し発表する、2）担当教員が一人一人の学生の意見・発表に対してコメントをする、3）もち寄った作業を全員で批判的にディスカッションし、理解を深めていく。			
授業計画			
第1回：辞書学および自動言語処理額についてのイントロダクション			
第2回：データバンクの紹介とLexico5ソフトのインストール			
第3回：いくつかの辞書と文法書の観察と比較			
第4回：辞書学の規則に従った自動言語処理の講義			
第5回：議論1：5つのモノリンガル辞書における観察と導入部の分析			
第6回：議論2：5つのバイリンガル辞書における観察と導入部の分析			
第7回：議論3：各自のオリジナルデータの紹介			
第8回：議論4：各自のデータベースによるLexico5ソフトの使用			
第9回：議論5：バイリンガル辞書における各種翻訳の紹介			
第10回：議論6：モノリンガル辞書における導入部の編集			
第11回：議論7：バイリンガル辞書を作るための各種翻訳			
第12回：議論8：モノリンガル辞書を作るための導入部の編纂			
第13回：議論9：Lexico5ソフトによる各自のデータベースの紹介			
第14回：結論：これまでの議論のまとめ			
定期試験は実施しない			
テキスト			
なし			

参考書・参考資料等
Lexico5 ソフトを各自のパソコンにインストールする。
研究のために様々な辞書と文法書を参照する。
学生に対する評価
評価は、9回の発表・議論を対象とする。

授業科目名：	教員の免許状取得のための	単位数：	担当教員名：中西弘、山田智久
対照言語学特論	選択科目	2 単位	担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める	教科に関する専門的事項		
科目区分又は事項等			
授業のテーマ及び到達目標			
対照言語学の基本概念を学び、母語話者・第二言語学習者がそれぞれの言語を脳内でどの様に知覚・処理・獲得しているのか検討する。			
授業の概要			
対照言語学の基本概念と具体的な研究例を教員が概説し、関連する文献を学生がレポートし、検討すべき課題についてディスカッションする。			
授業計画			
第1回：イントロダクション：対照言語学とは何か			
第2回：英語分節音（母音）と知覚メカニズム			
第3回：日本語分節音（母音）と知覚メカニズム			
第4回：英語分節音（子音）と知覚メカニズム			
第5回：日本語分節音（子音）と知覚メカニズム			
第6回：英語プロソディ（アクセント・イントネーション）と理解メカニズム			
第7回：英語プロソディ（リズム）と理解メカニズム			
第8回：日本語プロソディ（アクセント）と理解メカニズム			
第9回：日本語プロソディ（リズム）と理解メカニズム			
第10回：日英音響分析：Praatを用いた分節音・プロソディ分析			
第11回：日英統語論（文構造・移動）と文理解メカニズム			
第12回：日英統語論（意味役割）と文理解メカニズム			
第13回：日英統語論（下位範疇化情報）と文理解メカニズム			
第14回：日英語用論と理解メカニズム			
テキスト			
特に指定せず、各回のトピックに応じて参考文献として言及する。			
参考書・参考資料等			
三原健一・高見健一（編）「日英対象 英語学の基礎」くろしお出版			
学生に対する評価			
授業時の発表とディスカッション			

授業科目名： 文学理論	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：加藤洋介、宮本(林田)敬子、ユスチナ W. カシャ 担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
20世紀の文学批評史で発展した文学理論について、とくにその流れと主要な著作の理解を深め、文学批評の理論的関心を高めるとともに、文学理論を意識的に用いて論文を作成できるようにする。			
授業の概要			
まず、20世紀の文学批評史で発展した文学理論の主要な著作をとり上げ、講義し、その理解を深める。ケンブリッジ英文学にはじまり、ニュークリティシズム、構造主義、マルクス主義を経てポストコロニアル批評に至る歴史を点描する。学生は、講義で配布される文献リストをつかって関心を見つけ、主要な著作を読み、その理解を講義で報告することを求められる。最終的に、文学理論をさまざまな文学テキストの分析に適用し、テキストの解釈を理論的に組み立てられるように指導する。現代における文学研究のさまざまな可能性について考え、文学を理論的に分析するためのアプローチを身につけ、それらを研究する能力を修得する。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション、文献案内			
第2回：1920年代の批評風土			
第3回：初期の文学理論とヒューマニズム			
第4回：初期の文学理論と精神分析			
第5回： ソシユールの共時言語学			
第6回：構造主義批評			
第7回：50年代、60年代の批評（1）文学理論と社会学			
第8回：50年代、60年代の批評（2）文学理論における読者の概念			
第9回：文学理論におけるヒューマニズム			
第10回：精神分析批評			
第11回：マルクス主義批評			
第12回： ポストコロニアリズム			
第13回： ポストコロニアル文学の動向と批評			
第14回： まとめ：批評理論をどうつかうか			
定期試験は実施しない			
テキスト			

特になし
参考書・参考資料等 テリー・イーグルトン『文学とは何か』（岩波文庫、2014）ほか （講義中に文献リストを配布する）
学生に対する評価 プレゼンテーション（80％）、討論を含む講義参加への取り組み（20％）

授業科目名：イギリス 近代文学特論	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2 単位	担当教員名：リチャード ホド ソン、加藤洋介、三宅敦子 担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
代表的な文学作品の読解を通じて、イギリス近代文学の英語表現、主題、文体を正確に理解する。また、その社会的、文化的、歴史的背景を理解し、文学作品との密接な関連性を研究する。			
授業の概要			
16世紀以降に書かれたイギリス近代文学作品を読み、イギリスの文化背景が、その時代の文学に与えた影響を検討する。イギリス近代文学の成り立ちや文学研究の方法を提示しながら、社会背景や思想の諸相と文学者・文学作品の関係について講義した上で、イギリスで自然に使用される表現の重要性を指摘し、それらが文学の中でどのように知的な機能を果たすかを理解する能力を高める。言語、文学ジャンル、文化がその時代背景と相互に密接な関わり合いをもってきたことをふまえて、文学を考察する力を修得する。			
授業計画			
第1回：オリエンテーション：英文学史における近代英文学の位置づけ			
第2回：イギリスの代表的近代文学作品の研究：歴史的背景			
第3回：イギリスの代表的近代文学作品の研究：社会的コンテキスト			
第4回：イギリスの代表的近代文学作品の研究：文学・文化的コンテキスト			
第5回：イギリスの代表的近代文学作品の研究：著作者・出典			
第6回：イギリスの代表的近代文学作品の講読：話題と内容			
第7回：イギリスの代表的近代文学作品の講読：テーマ			
第8回：イギリスの代表的近代文学作品の講読：英語表現			
第9回：イギリスの代表的近代文学作品の講読：ジャンルや文体の特徴			
第10回：イギリスの代表的近代文学作品の研究：批評的アプローチの概説			
第11回：イギリスの代表的近代文学作品の研究：様々な批評的アプローチによる分析			
第12回：イギリスの代表的近代文学作品の研究：反応、影響、脚色			
第13回：研究発表（学生によるプレゼンテーション）及びディスカッション			
第14回：イギリスの代表的近代文学作品に関する総括的な振り返り			
定期試験は実施しない			
テキスト			
なし。授業中に指示する。			
参考書・参考資料等			

石塚久郎『イギリス文学入門』（三修社）

Hoenselaars, Ton (ed.) 『The Cambridge Companion to Shakespeare and Contemporary Dramatists』 (CUP)

Rawson, Claude (ed.) 『The Cambridge Companion to English Poets』 (CUP)

※その他の参考文献は、授業内で適宜紹介する。

学生に対する評価

プレゼンテーションを含む授業内活動への取り組み(40%)、期末レポート(60%)。

授業科目名：イギリス文化研究	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：三宅敦子、河原真也、リチャード・ホドソン 担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
【テーマ】 現在のイギリスが抱えるさまざまな問題の背景に存在するイギリス文化の諸相を考察する。			
【到達目標】 ①イギリスの社会的、文化的、歴史的コンテキストを理解し、その文化現象の分析および研究のアプローチを理解する。 ②イギリスの地域の多様性と歴史を理解する。 ③近代以降、主に大英帝国の広がりとともに英国人が世界各地に渡り、新しい文化を創り出したことをふまえ、イギリス、アイルランド、アメリカ、カナダ、オーストラリアなどを含めた英語圏地域との関わりについて考察できる。			
授業の概要			
講義は各回の授業内容に沿って、教員が準備した教材を使いながら進める。授業は教員が準備した教材の内容をもとに教員と学生との質疑応答およびディスカッションをもとに学生の理解を深める。到達目標の到達度を測るために、事後学習として、毎回の授業終了後にMoodleコースに掲載する課題に取り組むことが求められる。また3つの到達目標の統合的な到達度を測るために、授業で学んだテーマの中から関心を持った複数のテーマについて統合的にリサーチをし、14回目の講義で発表し、発表した内容をレポートとして作成・提出することが求められる。			
授業計画			
第1回：文化の定義（1）19世紀			
第2回：文化の定義（2）20世紀前半			
第3回：英語と英語圏			
第4回：文化研究の実践（1）イギリスの歴史とイギリス文学の成り立ち			
第5回：文化研究の実践（2）イギリスの宗教と生活			
第6回：文化研究の実践（3）イギリスの音楽			
第7回：文化研究の実践（4）イギリスの映像文化とメディア			
第8回：文化研究の実践（5）イギリスの美術			
第9回：文化研究の実践（6）イギリスのスポーツ身体文化			
第10回：文化研究の実践（7）イギリスの教育と社会階層			
第11回：文化研究の実践（8）イギリスの王室と政治			

第12回：文化研究の实践（9）世界の中のイギリス

第13回：文化研究の实践（10）学生による实践のプレゼンテーション

第14回：まとめ——イギリス文化研究の知識を現代イギリスの理解にどう生かすか

定期試験は実施しない

テキスト

特になし

参考書・参考資料等

下楠昌哉責任編集『イギリス文化入門』（三修社 ¥3,400＋税）

※その他の参考書は学生の関心に応じて適宜授業内で紹介する。

学生に対する評価

毎回の授業内活動と14回目の発表（40%）、毎回の事後学習としてのMoodleコース上での課題（25%）と授業終了時にMoodleコース上で提出するレポート（35%）に基づいて評価する。

授業科目名： アメリカ文学特論	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：宮本(林田) 敬 子、藤野 功一
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
本講義の目標は、以下の4点である。1) 文学テキストを精読し、その分析方法を学ぶと同時に、アメリカ文学への理解を深める。2) 文学テキストが生み出されたアメリカの思想的背景、歴史、社会についての理解を深める。3) 文学テキストを通して、アメリカ文学や文化における特徴的なテーマについて考察し、またテーマの考察に必要な批評理論や分析方法を学ぶ。4) 文学テキストの精読をもとに、各自の関心に基づいたテーマについて参考文献を読み、分析的レポートを作成する。			
授業の概要			
アメリカ文学を題材に、その歴史的・社会的背景、文化や思想とどのような影響関係のなかでテキストが成立しているのかを考察する。作品分析にあたっては、人種・階級・ジェンダー・セクシュアリティ等の視点を軸に、文学作品に現れた多様な価値のネットワークを認識し、批判的分析力を育む。同時に、フェミニスト文学批評理論、ポストコロニアル批評、ジェンダー・セクシュアリティ研究、環境批評等を踏まえつつ、アメリカ文学および文化芸術を分析・批評する方法を修得する。			
授業計画			
第1回：文学テキストと精読			
第2回：文学テキストの言語分析			
第3回：キャラクターの分析：アメリカにおける人種と階級			
第4回：キャラクターの分析：アメリカにおけるジェンダーとセクシュアリティ			
第5回：文学テキストの空間：アメリカにおける場所と自然環境			
第6回：文学テキストの空間：アメリカにおける共同体と社会			
第7回：文学テキストの時間：時の流れ			
第8回：文学テキストの時間：歴史的背景とポストコロニアリズム			
第9回：文学テキストの視点			
第10回：文学テキストの語り			
第11回：文学テキストの構造			
第12回：文学テキストのテーマ			
第13回：文学テキストの作家と読者			
第14回：文学テキストと批評理論			
定期試験は実施しない			
テキスト			
授業中に適宜指示する			

参考書・参考資料等

Toni Morrison, *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination* (1992). その他、授業中に適宜紹介する。

学生に対する評価

授業への取り組み(発表・ディスカッション) (50%)および提出課題の成績(50%)による。

授業科目名：アメリカン・レトリック研究	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：藤野 功一、宮本(林田) 敬子
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
アメリカ文学のレトリックをテーマとして、アメリカの知的伝統に連なる言語表現を考察する力を育み、アメリカ文化に根差した慣用表現を理解できるようにする。			
授業の概要			
アメリカ作家の作品を読み、その内容の複雑さを学生自身が読み解けるようになることを目的に、アメリカ文学作品の緻密な分析を通して、アメリカの知的伝統に連なるレトリックを考察する。イディオムやことわざなどで用いられている実例を示して、アメリカ人が自然に使用する表現の重要性を指摘し、それらがアメリカ文学の中でどのように知的な機能を果たすかを理解する能力を高め、様々な英語において生み出されるアメリカ文化に根差した慣用表現を取り扱う力を修得する。			
授業計画			
第1回：導入：アメリカ文学作品のレトリック			
第2回：アメリカの知的伝統について			
第3回：アメリカのイディオムについて			
第4回：アメリカのことわざについて			
第5回：アメリカ的な表現とその知的機能について			
第6回：アメリカ文化に根差した慣用表現について			
第7回：アメリカ文学におけるレトリックの伝統について			
第8回：アメリカ文学作品におけるレトリックの実例			
第9回：アメリカ文学作品におけるレトリックの機能			
第10回：アメリカ文学作品におけるレトリックの分析			
第11回：アメリカ文学作品におけるレトリックの解釈			
第12回：アメリカ文学作品におけるレトリックの考察			
第13回：アメリカ文学作品におけるレトリックと作品解釈			
第14回：アメリカ文学作品におけるレトリックの価値			
定期試験は実施しない			
テキスト			
授業中に適宜指示する			
参考書・参考資料等			
Richard Chase. The American Novel and Its Tradition (Johns Hopkins UP)			

Kenneth Burke. The Philosophy of Literary Form (U of California P)
学生に対する評価 授業中での発表状況(20%)、授業中の課題 (40%)、レポート (40%)を総合評価する。

授業科目名： 英語圏文学特論	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：藤野 功一、 一谷 智子
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
環太平洋圏および北アメリカを含む英語圏文学の研究方法を学ばせるとともに、その社会的、文化的、歴史的な文脈を解説し、テキストと社会および文化との関係を理解する。			
授業の概要			
植民、移民の歴史のなかでの英語圏文学の発展は、英語の発展および英語圏の拡大の歴史と深くかかわることを理解させ、人種、ジェンダー、民族といった観点を中心に、作品が描かれた社会における歴史と文化を知り、複眼的視点を確立しつつ、具体的な作品の批評的読解を通して文学を考察できるようにする。			
授業計画			
第1回：環太平洋圏および北アメリカを含む英語圏文学の研究方法について			
第2回：環太平洋圏および北アメリカを含む英語圏文学の社会的文脈について			
第3回：環太平洋圏および北アメリカを含む英語圏文学の文化的文脈について			
第4回：環太平洋圏および北アメリカを含む英語圏文学の歴史的な文脈について			
第5回：英語圏文学テキストと社会および文化との関係について			
第6回：植民の歴史のなかでの英語圏文学の発展について			
第7回：移民の歴史のなかでの英語圏文学の発展について			
第8回：英語の発展の歴史と英語圏文学について			
第9回：英語圏の拡大の歴史と英語圏文学について			
第10回：人種と英語圏文学について			
第11回：ジェンダーと英語圏文学について			
第12回：民族と英語圏文学について			
第13回：批評的読解における複眼的視点について			
第14回：具体的な作品の批評的読解について			
定期試験は実施しない			
テキスト			
授業中に適宜指示する			
参考書・参考資料等			
J. Hillis Miller. <i>On Literature</i> (Routledge)			
Emory Elliott. <i>Columbia Literary History of the United States</i> (Columbia UP)			

Yunte Huang. Transpacific Imaginations: History, Literature, Counterpoetics (Harvard UP)

学生に対する評価

授業での発表状況（20%）、プレゼンテーション（30%）、レポート（50%）等を総合評価する。

授業科目名： 英語圏表象文化特論	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：三宅 敦子、宮本 (林田) 敬子、石田 由希 担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標 英語圏の表象文化における様々な表現を正確に理解する読解力を養い、その表象文化を生み出した国や地域の文化・社会・歴史について理解を深める。			
授業の概要 英語圏の表象文化における様々な視覚表現や言語表現の内容と形式を正確に読解する力を身につけるために、映像芸術・舞台芸術・言語芸術を分析する様々なアプローチを学ぶ。また、プレゼンテーションを通して自分の解釈をまとめる作業を行い、その内容を教員と学生、あるいは学生同士のディスカッションによって確認する。さらに、それらの表象文化を生み出した社会的、文化的、歴史的コンテクストをより専門的な次元で理解し、表象文化作品の生産と社会が深く関連することを認識できるようにする。			
授業計画 第1回：イントロダクション：表象文化とは 第2回：映像芸術（1）内容と形式的要素（構図やカメラワークなど）を把握する 第3回：映像芸術（2）社会的文脈を検討する 第4回：映像芸術（3）文化的背景を考察する 第5回：映像芸術（4）歴史的文脈を分析する 第6回：舞台芸術（1）内容と形式的要素（舞台の形状や座席の位置など）を把握する 第7回：舞台芸術（2）社会的文脈を検討する 第8回：舞台芸術（3）文化的背景を考察する 第9回：舞台芸術（4）歴史的文脈を分析する 第10回：言語芸術（1）内容と形式的要素（文体や構成など）を把握する 第11回：言語芸術（2）社会的文脈を検討する 第12回：言語芸術（3）文化的背景を考察する 第13回：言語芸術（4）歴史的文脈を分析する 第14回：学期のまとめ、表象文化に関するレポートの書き方 定期試験は実施しない			
テキスト なし。授業内で適宜指示する。			
参考書・参考資料等			

北村匡平『24フレームの映画学』昇洋書房、2021年。

佐和田敬司『演劇学のキーワード』ペリかん社、2007年。

小林章夫編『テキスト：危機の言説』東京大学出版、2000年。

※その他の参考文献は、授業内で適宜紹介する。

学生に対する評価

プレゼンテーションを含む授業内活動への取り組み（40%）、期末レポート（60%）。

授業科目名：英語圏地域研究（ヨーロッパ）		教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：河原 真也、 加藤 洋介、石田 由希 担当形態：クラス分け・単独
科 目		教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等		教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標				
【テーマ】 イギリスやアイルランドの特定の地域に存在する事象を取り上げ、歴史的、社会的な背景を踏まえながら、21世紀のイギリス（アイルランド）社会が抱える問題の根源を解明する。				
【到達目標】 ①イギリスまたはアイルランドの歴史とこれらの地域の多様性を理解する。 ②イギリスまたはアイルランドが現在抱える問題（移民など）の根源と、これらの地域の歴史が関係していることを理解する。 ③文学作品の中にこれらの地域が抱える問題が投影されていることを見抜き、文学研究の新たな一面を体験する。				
授業の概要				
イギリス、アイルランドをはじめとする植民、移民の歴史を持つ国を含む文学・文化現象をとり上げ、テキスト分析および文学研究のアプローチを学ぶとともに、その社会的、文化的、歴史的コンテキストを解説し、文学テキストと社会および文化の発展が深く関連することを理解する。グローバル言語としての英語が発展していく歴史のなかで英語文学が果たした役割を踏まえながら、地域文学と文化がどのように変容していったかを考察する能力を身につける。				
授業計画				
第1回：オリエンテーション： エリア・スタディーズとは？				
第2回：対象国（地域）の歴史を探究（1）：通時的視点から				
第3回：対象国（地域）の歴史を探究（2）：共時的視点から				
第4回：対象国（地域）の歴史を探究（3）：周辺国との関係性から				
第5回：事例研究（1）：政治・経済的コンテキストから				
第6回：事例研究（2）：社会的コンテキストから				
第7回：事例研究（3）：文化的コンテキストから				
第8回：テキスト分析（1）：テーマ				
第9回：テキスト分析（2）：作品と作者				
第10回：テキスト分析（3）：歴史的背景				
第11回：テキスト分析（4）：現在との関係				
第12回：テキスト分析（5）：地域特有の問題				

第13回：テキスト分析（5）読者の受容 第14回：研究発表（学生によるプレゼンテーション） 定期試験は実施しない
テキスト なし。授業中に指示する。
参考書・参考資料等 F. M. L. Thompson (ed.) <i>The Cambridge Social History of Britain, 1750-1950</i>, 3 Vols. (CUP, 1992) Diarmaid Ferriter, <i>The Transformation of Ireland 1900-2000</i> (Profile Books, 2010)
学生に対する評価 プレゼンテーションを含む授業内活動への取り組み(40%)、期末レポート(60%)。

授業科目名： 世界文学研究	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：一谷 智子、リ チャード ホドソン、ユス チナ W. カシャ
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
英語圏を中心とした地域における文学や演劇、映画、絵画などを含む言語・視覚芸術を考察の対象としながら、人間と社会、文化、環境の相互関係を理解するとともに、地域や国を超えて文学と文化を考察し受容する視点を習得する。			
授業の概要			
人種・階級・ジェンダーという人間的指標に、それと絡んで生成・展開する土地・風土・生きものなどの環境的指標を加え、英語圏を中心とした世界の多様な文学を環境、人間、社会との関係から分析する視点と研究手法を学ぶ。授業で学んだ視点と手法を用いながら、関心をもったテーマについてリサーチを行い、14回目の講義でその成果を発表するとともに、発表した内容をレポートにまとめる。			
授業計画			
第1回：環境人文学の歴史と変遷			
第2回：場所の概念と文学			
第3回：自然科学・テクノロジーと文学			
第4回：ジェンダーと環境文学			
第5回：階級と環境文学			
第6回：人種問題と環境文学			
第7回：先住民文学と環境文学			
第8回：動物論と文学			
第9回：ノンヒューマンの文学表象			
第10回：災害をめぐる文学			
第11回：環境をめぐる映像作品とその分析方法			
第12回：環境をめぐる演劇作品とその分析方法			
第13回：環境をめぐるアートとその分析方法			
第14回：プレゼンテーション			
定期試験は実施しない			
テキスト			
なし。授業内で適宜指示する。			

参考書・参考資料等

Greg Garrard, *Ecocriticism* (Routledge, 2004), Glotfelty, Cheryll, and Harold Fromm, eds. *The Ecocriticism Reader: Landmarks in Literary Ecology* (Athens: U of Georgia P, 1996), Lawrence Buell, *The Future of Environmental Criticism* (Blackwell Publishing, 2005), エコクリティシズム研究会『オールタナティヴ・ヴォイスを聴く：エスニシティとジェンダーで読む』（音羽書房鶴見書店、2011）

学生に対する評価

プレゼンテーションを含む授業内活動への取り組み（40%）、期末レポート（60%）。

授業科目名： 英語教育学研究	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：C. L. ドーハティ、 伊藤 彰浩、横溝 紳一郎 担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標 本科目の目的は、「英語教育学特論」で獲得した知識と技能を拡大・深化させることをテーマに、第二言語習得研究と日本の外国語教育政策の理解に根差した中等教育レベルの学習者を対象とした教育技能の知識と技能の獲得を目指す。			
授業の概要 第二言語習得研究と日本の外国語教育政策の理解に根差した中等教育レベルの学習者を対象とした （１）言語活動を促進させるために適切な教材の開発、（２）学習者の多様性に配慮した授業デザイン、 （３）教室運営のあり方、（４）ICT教材の効果的利用法、（５）英語学力の測定と評価、について指導し、 これらの知識と技能が習得できるよう指導する。			
授業計画 第１回：第二言語習得研究について 第２回：日本の外国語教育政策の理解について 第３回：中等教育レベルの学習者について 第４回：言語活動を促進させる教材について 第５回：言語活動を促進させる教材の開発について 第６回：学習者の多様性に配慮した授業について 第７回：学習者の多様性に配慮した授業デザインについて 第８回：教室運営のあり方について 第９回： 教室運営の実践について 第１０回：ICT教材について 第１１回：ICT教材の効果的利用法について 第１２回：英語学力について 第１３回：英語学力の測定について 第１４回：英語学力の評価について 定期試験は実施しない			
テキスト 授業中に適宜指示する			
参考書・参考資料等 Marianne Celce-Murcia, Donna M. Brinton, <i>Marguerite Ann Snow, David Bohlke, Teaching English as a Second or Foreign Language</i> , 4th edition, Heinle ELT.			

中学校学習指導要領 外国語（平成29年3月告示 文部科学省）

高等学校学習指導要領 外国語（平成30年3月告示 文部科学省）

中学校学習指導要領解説 外国語編（平成29年7月 文部科学省）

高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編（平成30年7月 文部科学省）

学生に対する評価

授業での発表状況（10%）、提出物（10%）、プレゼンテーション（30%）、レポート（50%）等を総合評価する。

授業科目名： 英語教育学特論	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2 単位	担当教員名：C. L. ドーハティ、 伊藤 彰浩、横溝 紳一郎 担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校 英語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
本科目の目的は、第二言語習得研究の知見等を踏まえ、将来の英語科教員に必要なスキルを獲得させることである。			
授業の概要			
英語学習と指導について理論的、実証的に自らに言葉で説明し実践的な指導力を発揮できるように（１）学習指導要領の内容の確認と教材開発にかんする知識の深化と技能の拡大（２）学習指導案作成など実践にかんする知識の深化と技能の拡大、そして（３）第二言語習得論に基づく英語学習法、指導法の教育現場への応用にかんする知識の獲得を目指す。第二言語習得研究の知見等を踏まえ、将来の英語科教員に必要なスキルを獲得させることである。			
授業計画			
第１回：第二言語習得研究の視点からみた日本人の英語学習の実態			
第２回：学習指導要領の視点からみた日本の英語教育政策			
第３回：学習指導要領の視点からみた日本の英語学習者			
第４回：学習指導要領の視点からみた英語学習教材			
第５回：学習指導要領の視点からみた日本の英語科教員像			
第６回：英語指導における個へのアプローチ			
第７回：学習者の自律性を促進する授業デザイン			
第８回：学習者の多様性を踏まえた教室運営			
第９回：外国語学習を支援するテクノロジーの役割			
第１０回：ICT教材の利用と留意点			
第１１回：英語学学力の測定と評価の前提条件			
第１２回：量的アプローチによる英語学力の測定と評価			
第１３回：質的アプローチによる英語学力の測定と評価			
第１４回：将来の英語科教員に必要なスキル			
定期試験は実施しない			
テキスト			
授業中に適宜指示する			
参考書・参考資料等			
Marianne Celce-Murcia, Donna M. Brinton, <i>Marguerite Ann Snow, David Bohlke, Teaching English as a Second or Foreign Language</i> , 4th edition, Heinle ELT.			

中学校学習指導要領 外国語（平成29年3月告示 文部科学省）

高等学校学習指導要領 外国語（平成30年3月告示 文部科学省）

中学校学習指導要領解説 外国語編（平成29年7月 文部科学省）

高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編（平成30年7月 文部科学省）

学生に対する評価

授業での発表（30%）、提出物（20%）、レポート（50%）等を総合評価する。

授業科目名： フランス言語学A	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：ジャン＝リュック・アズラ、杉山 香織、 T. トリュベール
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 フランス語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
この授業の目的は、言語学を通してことばとは何かを理解することである。授業終了時には、言語学の諸問題を扱う非規範的な能力を獲得することができる。			
授業の概要			
言語学は人間の言語の科学的研究である。本講義は、言語事実の観察を基盤にし、フランス語の語彙論を中心に語彙の体系を意味論との関係において考察する語彙形態論、および方言学を研究する。語彙には音、形態、意味の側面があるが、日常的表現を通して、類義語、反意語などの形成、あるいは語と語との合成による複合語について、それらの原則を観察する。また、フランス語圏におけるクレオール語の形成のしかたについても言及する。			
授業計画			
第1回：Le lexique (composition, morphologie) 語彙（構成、形態）			
第2回：Le lexique (sémantique) 語彙（意味）			
第3回：Le lexique (composition) 語彙（構成）			
第4回：Conjugaison 活用			
第5回：Antonymes 反意語			
第6回：Synonymes 類義語			
第7回：Homonymes 同音異義語			
第8回：Variation 変異			
第9回：Changements linguistiques 言語変化			
第10回：Prescriptivisme (mots) 規範主義（語）			
第11回：Prescriptivisme (expressions) 規範主義（表現）			
第12回：Accents アクセント			
第13回：Dialectes 方言			
第14回：Créoles クレオール			
定期試験は実施しない			
テキスト			
なし			
参考書・参考資料等			

フランス語史 / ジャック・ショーラン著 ; 川本茂雄, 高橋秀雄共訳(文庫クセジュ; 534)白水社1973

Histoire de la langue française / Jacques Chaurand, Que sais-je? 167, Paris : Presses universitaires de France, 1972

Histoire de la langue française / Jacqueline Picoche, Christiane Marchello-Nizia, Paris : Nathan, 1994

基本から学ぶラテン語/河島思朗, ナツメ社, 2016

Abrege de grammaire latine / R. Morisset [et al.] Paris : Editions Magnard, 1995

L'indo-europeen / Jean Haudry, Que sais-je? 1798, Paris : Presses universitaires de France, 1994

比較言語学入門/高津春繁, 岩波文庫, 1992

Grammaire Comparee Des Langues Indo-Europeennes / Franz Bopp, Nabu Press, 2012

学生に対する評価

小テスト (3回)

授業科目名： フランス言語学B	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：ジャン＝リュック・アズラ、杉山 香織、T・トリュベール
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 フランス語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標 この授業の目的は、言語学を通してフランス語の歴史を理解することである。授業終了時には、歴史言語学の諸問題を扱うための非規範的な能力を身につけることができる。			
授業の概要 言語学は人間の言語の科学的研究である。本講義では、フランス語の語源と変遷を概観することで言語の変化がいかに、どのような文脈で起こるかを理論的に理解する。印欧語族と古代インド・ヨーロッパ世界、古典ラテン語や口語ラテン語と地中海世界、そして古フランス語とフランス中世から近代の世界という通時的視点を概観する。その後、現代フランス語の成立を音、綴り字、語彙において観察する共時的視点を提示する。また、フランス語に特有の鼻母音の発展についても言及する。			
授業計画 第1回：履修者による発表 第2回：インド・ヨーロッパ言語 第3回：古代のヨーロッパ・地中海言 第4回：ギリシャ語：ラテン語とフランス語への影響 第5回：フランス語における口語ラテン語 第6回：古典ラテン語から口語ラテン語 第7回：ラテン語 第8回：中世のフランス語（古フランス語） 第9回：鼻母音の変化（9～14世紀） 第10回：鼻母音の変化（14～21世紀） 第11回：近代的なフランス語への変遷（15～19世紀） 第12回：現代フランス語変遷（20、21世紀）：語彙 第13回：現代フランス語の変遷（20、21世紀）：つづり字 第14回：現代フランス語の変遷（20、21世紀）：発音 定期試験は実施しない			
テキスト なし			

参考書・参考資料等

フランス語史 / ジャック・ショーラン著 ; 川本茂雄, 高橋秀雄共訳(文庫クセジュ; 534)白水社 1973

Histoire de la langue française / Jacques Chaurand, Que sais-je? 167, Paris : Presses universitaires de France, 1972

Histoire de la langue française / Jacqueline Picoche, Christiane Marchello-Nizia, Paris : Nathan, 1994

基本から学ぶラテン語/河島思朗, ナツメ社, 2016

Abrege de grammaire latine / R. Morisset [et al.] Paris : Editions Magnard, 1995

L'indo-europeen / Jean Haudry, Que sais-je? 1798, Paris : Presses universitaires de France, 1994

比較言語学入門/高津春繁, 岩波文庫, 1992

Grammaire Comparee Des Langues Indo-Europeennes / Franz Bopp, Nabu Press, 2012

学生に対する評価

小テスト (3回)

授業科目名：フランス語教育工学A		教員の免許状取得のための 選択科目		単位数： 2単位		担当教員名：杉山 香織、 ジャン＝リュック・アズラ、 T. トリュベール	
		担当形態：クラス分け・単独					
科 目		教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 フランス語）					
施行規則に定める 科目区分又は事項等		教科に関する専門的事項					
授業のテーマ及び到達目標							
コーパス言語学を概観し、コーパスがフランス語教育にもたらす可能性を考える							
授業の概要							
本講義は、言語事実の観察を基盤にし、特にフランス語教育と外国語習得に関する研究方法を教授する。コーパス言語学について解説し、実際にコーパスに基づいたフランス語教育のあり方を指南する。研究テーマ設定、文献収集のしかた、先行研究のまとめ方、量的・質的データ分析のしかた、研究結果のまとめ方など、教育学の領域について理解するために解説する。外国語学習におけるデータ分析がいかに必要であるかについて考察する。							
授業計画							
第1回：コーパス言語学とは何か							
第2回：言語学の諸分野におけるコーパス研究（音声・音韻、形態・統語）							
第3回：言語学の諸分野におけるコーパス研究（語彙、社会言語）							
第4回：多言語コーパスと対照言語学							
第5回：応用言語学とコーパス研究（言語習得と言語教育）							
第6回：フランス語のコーパス							
第7回：フランス語のコーパスへのアクセス							
第8回：コーパス分析のツール（AntConc, CLAN）							
第9回：コーパス分析の実践①記述統計、語彙の豊かさ							
第10回：コーパス分析の実践②頻度差の検証							
第11回：ミニリサーチ①テーマ							
第12回：ミニリサーチ②先行研究のまとめと方法論							
第13回：ミニリサーチ③分析結果							
第14回：ミニリサーチ④教育現場への応用							
定期試験は実施しない							
テキスト							
S. Zufferey (2020) Introduction à la linguistique de corpus. ISTE éditions.							
参考書・参考資料等							
適宜指示する							
学生に対する評価							
授業準備(40%)＋レポート（60%）							

授業科目名： フランス語教育工学B	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：杉山 香織、 ジャン＝リュック・アズラ、 T. トリュベール
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 フランス語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
コーパスに基づく分析を通して、フランス語教育や外国語習得を理解する			
授業の概要			
本講義は、言語事実の観察を基盤にし、特にフランス語教育と外国語習得に関する知見を獲得・拡充することを目的とする。フランス語教育に関する文献を教材とし、学習者の興味に従ってその領域に関するコーパスを分析する。ツールとしてのコーパスに触れながらコーパス言語学について解説し、実際にコーパスに基づいたフランス語の分析を行ないながら講義する。			
授業計画			
第1回：コーパスの構築			
第2回：コーパスのアノテーション			
第3回：Python①基本動作			
第4回：Python②分岐、ループ、関数、クラス			
第5回：Python③ファイル入出力			
第6回：形態素解析①TreeTagger			
第7回：形態素解析②spaCy, Stanza			
第8回：発表①文献紹介			
第9回：MWU①共起語			
第10回：MWU②n-gram			
第11回：発表②使用するコーパスの特性			
第12回：発表③方法論			
第13回：発表④分析結果			
第14回：コーパス言語学の応用可能性			
定期試験は実施しない			
テキスト			
S. Zufferey (2020) Introduction à la linguistique de corpus. ISTE éditions.			
参考書・参考資料等			
適宜指示する			
学生に対する評価			
授業準備(40%)＋レポート（60%）			

授業科目名：フランス語音声学・音韻論A	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：ジャン＝リュック・アズラ、杉山 香織 担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 フランス語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標 この授業の目的は、フランス語の音韻について理解することである。そのために、調音音声学、音響音声学、聴覚音声学について学ぶ。また、音声の分析に必要な技術的ツールであるダイアグラム、ソノグラム、音声記号の使用法について学ぶ。			
授業の概要 言語学は人間の言語の科学的研究である。本講義は、言語事実の観察を基盤にし、フランス語の音声学・音韻論について研究する。まず音声学（phonétique）を取り上げる。音声言語を対象とし、その理論的基礎を修得する。音声の産出から聴解まで、フランス語特有の母音・子音の体系を研究するとともに、超文節的にアクセント、リズム、イントネーションなどフランス語特有のプロソディーについても考察し、音と意味理解との関係を分析する。			
授業計画 第1回：フランス語の母音：調音（調音器官） 第2回：母音：音声記号 第3回：フランス語の母音：音響音声学（形成音） 第4回：フランス語の母音：聴覚音声学 第5回：フランス語の母音：鼻母音 第6回：フランス語の母音：ダイアグラム、ソノグラム 第7回：フランス語の子音：調音 第8回：子音：音声記号 第9回：フランス語の子音：音響音声学（形成音） 第10回：音節 第11回：リズムとイントネーション 第12回：訛りと方言 第13回：歴史的な変化と近年の変化 第14回：他言語との比較 定期試験は実施しない			
テキスト なし			

参考書・参考資料等

Phonetisme et prononciation du français / Pierre R. Léon Paris : Editions fernand Nathan , 1992.

La phonologie / Jean-Louis Duchet Paris : Presses universitaires de France , c1981. - (Que sais-je? ; 1975)

Phonologie, morphologie, lexicologie Paris : Armand Colin , c1988. - (Collection CURSUS ; . La grammaire / Joëlle Gardes-Tamine

学生に対する評価

小テスト (3回)

授業科目名：フランス 語音声学・音韻論B	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：ジャン＝リュッ ク・アズラ、杉山 香織
		担当形態：クラス分け・単独	
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 フランス語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標 この授業の目的は、フランス語音声学について、音韻論との違いを通して理解することである。この能力は、言語、特にフランス語の学習と教育に資する。			
授業の概要 言語学は人間の言語の科学的研究である。本講義は、言語事実の観察を基盤にし、フランス語の音声学・音韻論について研究する。ここでは音韻論（phonologie）の研究をする。音の最小単位である音素がどのように意味の違いをもたらすか、あるいはもたらさないかなど音素の弁別の特徴を考察する。形態音韻論のリエゾンについても言及する。このように、音の組み合わせ、入れ替えなどによって意味の違いの発生を認識し、考察する。			
授業計画 第1回：フランス語の音声（調音、音韻） 第2回：異音：日本語と英語の例 第3回：異音：ドイツ語とフランス語の例 第4回：音素：音素と異音の関係 第5回：ミニマルペア 第6回：単純な生成規則 第7回：複雑な生成規則 第8回：超分節要素：特徴 第9回：超分節要素：知覚 第10回：鼻母音：鼻音化 第11回：最適性理論：フランス語の場合 第12回：最適性理論：フランス語以外の言語の場合 第13回：まとめと復習 第14回：練習 定期試験は実施しない			
テキスト なし			
参考書・参考資料等 Phonetisme et prononciation du français / Pierre R. Léon Paris : Editions fernand			

Nathan , 1992.

La phonologie / Jean-Louis Duchet Paris : Presses universitaires de France , c198

1. - (Que sais-je? ; 1975)

Phonologie, morphologie, lexicologie Paris : Armand Colin , c1988. - (Collection

CURSUS ; . La grammaire / Joëlle Gardes-Tamine

学生に対する評価

小テスト (3回)

授業科目名：フランス語教授法特論A	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：ロランス シュヴァリエ、杉山香織、ジャン＝リュック・アズラ、武末祐子 担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 フランス語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標 この授業は、フランス語教員志望者を対象とし、学生が外国語としてのフランス語教育に不可欠な教授法を構成するいくつかの重要な概念を理解することを目的とする。			
授業の概要 「どのように教えるか」を考えると、対概念として「どのように学ぶか」を当然、考えないわけにはいかない。まず、この授業では、主な学習理論について考察し、次にその学習理論が支えている教授法について検討する。最後に、この検討は、各教授法の特徴をよりよく理解することになるので、この知見をFLE（外国語としてのフランス語）の教科書を分析しながら検討し、さらに中等教育における外国語（英語）教育に関する日本の文科省の方針についても考察する。			
授業計画 第1回：ディスカッション：外国語をどのように学ぶか？ 第2回：学習理論：教授型モデル 第3回：学習の理論：行動主義 第4回：学習理論：認知的アプローチと神経言語学 第5回：実践：理論とアプローチの関係 第6回：フランス語教育法における学習の概念：文法訳読法 第7回：フランス語教育法における学習の概念：直接教授法 第8回：フランス語教育法における学習の概念：参加型教授法 第9回：実践：教科書分析入門 第10回：フランス語教育法における学習の概念：オーディオ・ビジュアル法 第11回：フランス語教育法における学習の概念：コミュニケーション・アプローチ 第12回：CEFRと行動中心主義アプローチ 第13回：実践：最近使用されている教科書分析 第14回：文部科学省の言語政策：言語に関する一般的な方針と指示 定期試験は実しない			
テキスト なし			

参考書・参考資料等

JP. Cuq, I. Gruca (2017), "Cours de didactique du français langue étrangère et seconde", PUG

「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠」朝日出版社

学生に対する評価

授業に対する取り組み&課題（20%）＋実践（30%）＋レポート（50%）

授業科目名：フランス語教授法特論B	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：ロランス シュヴァリエ、杉山香織、ジャン＝リュック・アズラ、武末祐子 担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 フランス語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標 この授業は、フランス語教員志望者を対象とし、学生が外国語としてのフランス語教育に不可欠な教授法を構成するいくつかの重要な概念を理解することを目的とする。			
授業の概要 2000年代の初めに普及し始めたCEFRは、ヨーロッパ以外にも大きく知られ必読書となりつつあるが、大部分は参照レベルに留まっている。この授業では、CEFRを言語教育者に便利で基礎的概念を説明する考察ツールとして紹介する。特に6章と7章にフォーカスし、授業の準備について具体的に考察を行う。また、最近のCEFRの濫用的、標準化的な姿勢に注意を促す。			
授業計画 第1回：CEFRの起源と主な原則 第2回：評価のための能力記述文 第3回：指導原理としての自律性 第4回：理想的な学習者像 第5回：教師の役割 第6回：教育背景 第7回：学習ストラテジー 第8回：実践：自身の学習ストラテジーの分析 第9回：学習と習得，学習と教育 第10回：学習のダイナミズム 第11回：実践：インタラクティブな授業に向けた試み 第12回：単一言語主義、複言語主義と多言語主義 第13回：CEFRを日本の文脈に適合させるには 第14回：CEFRへの批判 定期試験は実行しない			
テキスト なし			
参考書・参考資料等 「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠」朝日出版社（2014年）			

《 Le cadre européen commun de référence pour les langues: apprendre, enseigner, évaluer 》, Conseil de l' Europe (2001)

《 Le cadre européen commun de référence pour les langues: apprendre, enseigner, évaluer. Volume complémentaire 》, Conseil de l' Europe (2018)

学生に対する評価

授業に対する取り組み&課題 (20%) + 実践 (30%) + レポート (50%)

授業科目名： 世界文学特論	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： ユスチナ W. カシャ
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 フランス語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
世界文学における代表問題を正確に理解するための読解力を養い、様々な文学を生み出した国や地域の文化について理解する。			
授業の概要			
欧米のみならず、アジア、アフリカ、オセアニアなどに拡大する現代文学に目を向けることを通して、グローバル時代の文学の新しい読み方・捉え方を学ぶ。ポストコロニアル理論を中心に、文化や文学を含めた「言葉」と「言語」が世界システムや現代社会における問題とどのように関わるかを分析し、さらに、20世紀後半に始まった主な政治的、社会的、領土的大きな変化が「文学」の考え方のパラダイムをどのように変えたかを考察する力を修得する。			
授業計画			
第1回：世界文学への入門：世界文学とは何か？（Introduction: What is world literature? / Qu’ est-ce que la littérature mondiale ?）			
第2回：グローバル時代における文学の解釈と分析（Literary analysis in a Global Age / L’ analyse littéraire à l’ ère de la mondialisation）			
第3回：世界文学の主な研究ポイント：テキスト構造・ジャンル・作者・文学モチーフ（Key points in World Literature : text structure, literary genres, authorship and literary motifs/ Points clés de la littérature mondiale : structure du texte, genres littéraires, auteurs et motifs littéraires）			
第4回：世界文学と異文化コミュニケーション（World Literature and Cross-cultural communication / Communication interculturelle dans la littérature mondiale）			
第5回：言葉と言語（Words and Languages/ Paroles et langues）			
第6回：越境する文学：母語で読めない国文学（バイリンガル・トランスリンガル）（Beyond mother tongue: bilingualism and translingualism / Les littératures bilingue et translingue）			
第7回：世界文学で他者との出会い：移民・マイノリティー文学（World Literature and the encounter with the Other: Literature of Displacement/ L’ image de l’ Autre : la littérature du déplacement）			
第8回：世界文学と翻訳：論理と実践（World Literature and Translation: theory and practice/ La littérature mondiale et la traductologie ）			

第9回：戦争とトラウマのイメージ：歴史的な証言としてフィクションを読む

(War and Trauma: Reading literary texts as historical testimonies/ La Guerre et le traumatisme dans la littérature mondiale)

第10回：世界文学とジェンダー：Écriture feminine から#metooまで (World Literature and

Gender: from écriture feminine to #metoo movement/

L'écriture féminine dans la littérature mondiale)

第11回：世界文学の代表作の演劇的および映画の適応

(Theatrical and Film adaptations of major works in world literature/ L'adaptation théâtrale et cinématographique de la littérature mondiale)

第12回：日本文学は世界文学でしょうか - 翻訳・解釈・マーケティング (Is Japanese literature

world literature?: translations, interpretations and marketing/ La place de la littérature japonaise dans la littérature mondiale)

第13回：授業のまとめ：世界文学の未来とは何か

(Course summary: The future of world literature/

Le résumé des cours : Le futur de la littérature mondiale)

第14回：学生研究発表 (Student-led presentations/ Exposés)

定期試験は実施しない

テキスト

Walter Ong “Orality and Literacy, Paul Ricoeur, *Time and Narrative*, Michel Foucault “Literature and Language”, Edward Said, *Orientalism*, Milan Kundera, *The Art of the Novel*; Jean-Paul Sartre, *What is Literature?*, Tawada Yoko, *Where Europe Begins*, Khaled Hosseini, *The Kite Runner*, Jhumpa Lahiri, *Interpreter of Maladies*, Danny Laferrière, *I am a Japanese Writer*, Mohsin Hamid, *Exit West*, Simone de Beauvoir, *The Second Sex*, Marguerite Duras *The Lover*, Elif Shafak, *A Black Milk*, Han Kang, *The Vegetarian*, Irene Nemirovsky, *Suite française* Kawakami Mieko, *Breasts and Milk*, Amélie Nothomb, *Fear and Trembling*, Michel Houellebecq *Submission*, Josef Czapski, *Inhuman Land Inhuman Land: Searching for the Truth in Soviet Russia, 1941-1942* Witold Gombrowicz, *Trans-Atlantic*, Isaac Bashevis Singer *The Magician of Lublin* など

参考書・参考資料等

David Damrosch, *What is World Literature* (「世界文学とは何か」2019年日本語訳)

沼野充義『世界文学論』東京：作品社、2020

『翻訳と文学』佐藤＝ロスベアグ・ナナ（編）、東京：みすず書房、2021

小野正嗣『世界文学への招待』東京：2016

『バイリンガルな日本語文学。他言語多文化の間』郭南燕（編）東京：三元社、2013

M.A. Orthofer, *The Complete Review Guide to Contemporary World Fiction* (2016)

How Literature Begin: A Global History (2021)

Rebecca, Walkowitz, *Born-Translated: Global: The Contemporary Novel in the Age of World Literature* (2015)

David Damrosch *Comparing Literatures: Literary Studies in Global Age* (2021)

David Damrosch and Gunilla Lindberg-Wada, *Literature : A World History* vol. 1-4 (2022)

Ranjan Ghosh and J. Hills Miller, *Thinking Literature across Continents* (2016) など

学生に対する評価

研究発表：40% ファイナル・レポート：60%

授業科目名：フランス語圏文学特論	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：真下 弘子、 和田 光昌
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 フランス語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
この授業では、フランス語を母語または公用語とする国と地域における文学作品を学ぶことを通して、次の3つの目標を達成することを目指す。1）時代ごとの特質を修得し文学における様々なフランス語表現を正確に理解するための読解力を養う。2）主に17世紀から20世紀までの文学史上の特定の時代思潮が、時代を超えた一般的美的概念としてどのように定着しているかを理解できるようにする。3）文学テキストを政治や社会、思想や諸芸術などとの関係性のなかで立体的に把握させることによって、現代フランス語のなかにある歴史的・文化的要素について考えさせる。			
授業の概要			
授業では、古典主義、ロマン主義、レアリズムなど、主に17世紀から20世紀までのフランス文学作品を取り上げて、文学テキストの原文を精読し作品におけるフランス語表現を正確に読み解く実践を行う。さらに、翻訳を用いて作品のテーマを見極めつつ、先行研究論文を参照して時代的・歴史的背景について考察を深める。通時態の視点からのフランス語圏文学の変貌と、共時的に見た場合のテキスト体系の構造的な諸変形についても学んでゆく。			
授業計画			
第1回：イントロダクション フランス語圏文学：世界の散文と分節言語			
第2回：フランス17世紀の文学潮流：バロックと古典主義			
第3回：劇場国家と文学			
第4回：18世紀「フィロゾフ」の文学			
第5回：悲劇ラシーヌ『アンドロマック』読解 典拠としてのギリシャ悲劇			
第6回：喜劇モリエール『女房学校』読解 笑劇の伝統			
第7回：18世紀・フィロゾフの文学			
第8回：タヒチの楽園幻想：ディドロ			
第9回：19世紀 ベルリオーズ『幻想交響曲』とロマン主義			
第10回：ロマン派の詩と詩人			
第11回：母音と色彩 ランボー『母音の詩』			
第12回：近代小説 ロマン派からレアリズムへ			
第13回：ユゴー『ノートルダム・ド・パリ』			
第14回：現代小説 批評意識とモデルニテ			
定期試験は実施しない			

テキスト

講義で扱う各作品のテキストの抜粋を配布する。

参考書・参考資料等

Collection litteraire Lagarde et Michard (Larousse-Bordas) 1997. ミシェル・フーコー、渡辺一臣・佐々木明訳『言葉と物』新潮社、1972.

学生に対する評価

授業における発表（20％）、レポート課題（20％）、期末試験（60％）による総合評価。

授業科目名：フランス語圏演劇特論	教員の免許状取得のための選択科目	単位数：2単位	担当教員名：真下 弘子 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 フランス語）		
施行規則に定める科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
この授業では、フランス語を母語または公用語とする国と地域における演劇、および、広い意味での演劇であるオペラ、ミュージカル、バレエやダンスなどのパフォーミング・アーツを学ぶことを通して、次の3つの目標を達成することを目指す。1）舞台の時間と空間、劇場空間と身体の関係について理解する。2）戯曲としてのテキストがどのように上演＝再現されて演劇作品となるのか、その表象プロセスを把握する。3）演劇表象に固有の触感や身振り、言語の可視性に注目することで、ミメシスとしての言語とパフォーマンスとしての演劇との関係が、時代や場、演じる身体によってどのように変化するかについて考えさせる。			
授業の概要			
授業では、主に17世紀バロック期から20世紀までのフランス語圏演劇作品を取り上げて、戯曲テキストの原文を読解しながらフランス語による演劇表現を読み解く実践を行い、さらに文化史的な大きな枠組みの中で言語と身ぶりの表象が演劇として自らを時間化・空間化していく過程を考察するために、時代ごとの演劇作品を鑑賞しながらその特徴を理解し、読み手や観客によって時代とともに揺れ動く、変容するテキストとして作品を捉える演劇批評の試みを行っていく。			
授業計画			
第1回：イントロダクション：演劇の誕生			
第2回：劇場と文学：劇場国家			
第3回：古典主義時代の劇文学とバロックバレエ、オペラ			
第4回：ピエール・コルネイユとその時代			
第5回：モリエールの喜劇と笑劇の伝統			
第6回：古典主義の頂点：ラシーヌの悲劇			
第7回：モリエール『女房学校』			
第8回：ラシーヌ『フェードル』			
第9回：演劇美学の拡大と変貌：18世紀ディドロと市民劇			
第10回：ユゴーの劇作とロマン派革命 批評的視座			
第11回：グランド・オペラ・ビゼー『カルメン』			
第12回：実存主義演劇：サルトルとカミュ 演劇と身体			
第13回：不条理演劇：ベケット『ゴドーを待ちながら』時間と空間			
第14回：演劇と映画：身ぶりと視覚の可能性			

定期試験は実施しない
テキスト 講義で扱う各作品のテキストの抜粋を配布する。
参考書・参考資料等 E. R. クルティウス、大野俊一訳『フランス文化論』みすず書房、1977、Victor-L. Tapie, Baroque et classicisme, Plon, 1957.
学生に対する評価 授業における発表（20％）、レポート課題（20％）、期末試験（60％）による総合評価。

授業科目名：フランス語圏小説特論A	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 和田光昌、武末祐子 担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 フランス語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
この講義では、フランス語圏におけるフランス語で書かれた文学作品を通して、次の3つの目標を達成することによって修士論文へのアプローチに寄与することを目指す。（1）フランス文学における小説はどのようにして確立したか （2）特に小説の世紀と言われる19世紀において、小説にはどのようなジャンル（短編・長編・幻想・風俗・歴史など）が生まれ、それを書く行為と書く主体は、どのようにテキスト内に現れうるか （3）具体的な小説テキストを取り上げ、小説を深く理解するために、テキスト分析のしかたを身につける。			
授業の概要			
この講義では、まず、フランス語による読解力を高めるため、具体的な短編小説を取り上げてフランス語の力を伸ばしながら、17世紀・18世紀の短編小説を概観し、19世紀の小説の誕生を解説する。常に同じ短編小説を読みながら、今度は小説のジャンルについて説明し、さらに小説構造に着目し、書く主体と行為について議論をする。最後にこれまで読んできた小説を理解するために、どのようにテキスト分析するのか、参考文献にも言及しながら検討する。			
授業計画			
第1回：イントロダクション			
第2回：Jules Verne <i>un drame dans les airs</i> 『空中の悲劇』を読解力養成のために読む			
第3回：『空中の悲劇』読解&17世紀『クレプの奥方』の解説			
第4回：『空中の悲劇』読解&&18世紀『美女と野獣』の解説			
第5回：『空中の悲劇』読解&ミニテスト1			
第6回：『空中の悲劇』読解&短編小説とは			
第7回：『空中の悲劇』読解&長編小説・歴史小説とは			
第8回：『空中の悲劇』読解&幻想小説とは			
第9回：『空中の悲劇』読解&ミニテスト2			
第10回：『空中の悲劇』読解&小説の構造			
第11回：『空中の悲劇』読解&誰が書いているか、書く行為とは何か			
第12回：『空中の悲劇』読解&小説内の背景と小説が書かれた時代背景			
第13回：『空中の悲劇』読解&テキスト分析とは			
第14回：学生による『空中の悲劇』分析のプレゼンテーション			
定期試験は実施しない			

テキスト
Jules Verne <i>Un drame dans les airs</i> in <i>Le Docteur OX</i> , J. Hetzel et Cie, 1874
参考書・参考資料等
ロラン・バルト『物語の構造分析』みすず書房 1979
加藤 民男、朝比奈 誼、饗庭 孝男『フランス文学史』白水社 1992
ツヴェタン・トドロフ『幻想文学論序説』創元ライブラリ 1999 など
学生に対する評価
授業中における発言とミニテスト2回：40% およびテキスト分析プレゼンテーション：60%

授業科目名：フランス語圏小説特論B	教員の免許状取得のための選択科目	単位数：2単位	担当教員名：和田 光昌
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 フランス語）		
施行規則に定める科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
フランス語を母語または公用語とする国と地域における近現代小説において、家庭や社会での地位、出身や性・ジェンダーなどによって、ともすればマージナルとみなされがちな存在がどのように主題化されてきたかを時代のなかに位置づけ、マイナー文学に向けて開かれたフランス小説の可能性を明らかにする。具体的なフランス小説のテキストを、語りの手法の観点から分析し、マイナーなものたちの声がどこから来て、誰に向けられて言語化されているのか、語り手と作者、そして読者は、その声とどのような関係性を取り結ぶのかなどについて理解させる。			
授業の概要			
博士前期課程における研究を進展させるため、必要となる学修課題に取り組み、習得した知識を自分自身の具体的な研究法に結び付け、自律的な研究者として自らの研究を展開できるよう指導を行う。			
授業計画			
第1回：イントロダクション：マイナー文学としてのフランス文学とは			
第2回：フランス近現代文学における子どもの表象(1)：フランス革命まで			
第3回：フランス近現代文学における子どもの表象(2)：19世紀前半			
第4回：フランス近現代文学における子どもの表象(3)：19世紀後半			
第5回：フランス近現代文学における子どもの表象(4)：20世紀前半			
第6回：フランス近現代文学における子どもの表象(5)：20世紀後半から現代まで			
第7回：フランス近現代文学における女性の表象(1)：19世紀前半			
第8回：フランス近現代学における女性の表象(2)：19世紀後半			
第9回：フランス近現代学における女性の表象(3)：20世紀前半			
第10回：フランス近現代学における女性の表象(4)：20世紀後半から現代まで			
第11回：フランス近現代文学における民衆の表象(1)：19世紀前半			
第12回：フランス近現代文学における民衆の表象(2)：19世紀後半			
第13回：移民文学としてのフランス文学			
第14回：まとめ			
定期試験は実施しない			
テキスト			
なし			

参考書・参考資料等

--Narina Bethlenfalvay, *Les visages de l' enfant dans la littérature française du XI^e Xe siècle*.

Esquisse d' une typologie, Droz, 1979.

--Martine Reid, *Des femmes en littérature*, Belin, 2010.

--大野一道『「民衆」の発見』、藤原書店、2011年。

学生に対する評価

・口頭発表：50% ・レポート：50%

授業科目名： フランス社会思想史	教員の免許状取得のため の選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：北垣 徹 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 フランス語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
本講義では、フランス語を母語または公用語とする国と地域における、様々な時代の社会思想についてのフランス語テキストを読解し、思想が言語によっていかに構築されているかを語学的、文化史的に分析し、哲学的な思考力を鍛えるとともに、個々の思想が置かれた歴史的・社会的文脈を探る。思想を形成する論理構造自体に刻まれた歴史性を明らかにし、思想という知が伝播し普及する過程で生じる、現代に至るまでの受容の変化を理解することで、総合的な判断力を養うことを目指す。			
授業の概要			
本講義では、フランス語を母語または公用語とする国と地域における、ルネサンス期から今世紀にかけての様々な時代における社会思想について、フランス語で書かれたテキストを読解しつつ、それらを宗教改革や人文主義、啓蒙思想、功利主義、社会ダーウィニズム、世俗的共和主義、実存主義、構造主義等々の思想的潮流と関連づけながら解釈していく。また思想家たちの属する社会階級や、思想の担い手となる結社、団体、組合、大学、研究所などの機関にも眼を向けつつ、新聞や雑誌、書籍など、思想を伝える諸メディアの各時代におけるあり方も考慮して、思想の社会的役割を多角的に検討する。			
授業計画			
第1回：イントロダクション：思想と歴史			
第2回：ルネサンスと人文思想			
第3回：ルネサンスの政治思想			
第4回：ガリカニズムとジャンセニズム			
第5回：デカルトと合理主義			
第6回：啓蒙思想（モンテスキューとヴォルテール）			
第7回：百科全書派（ディドロとダランベール）			
第8回：ルソーと社会契約論			
第9回：世俗的共和主義			
第10回：自由主義と個人主義			
第11回：功利主義			
第12回：社会ダーウィニズム			
第13回：実存主義（サルトルとメルロ＝ポンティ）			
第14回：構造主義（レヴィ＝ストロースとフーコー）			
定期試験は実施しない			

テキスト

授業内で適宜指示する。

参考書・参考資料等

Jean-François Braunstein/ Bernard Phan, *Manuel de culture générale: de l'antiquité au XXIe siècle*, Armand Colin, 2021.

学生に対する評価

授業内でのコメント・態度（10%）+授業内でのプレゼンテーション（70%）+学期末に作成するレポート（70%）

授業科目名：フランス 表象文化特論	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名：真下弘子、北垣徹、 和田光昌、武末祐子
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（高等学校 フランス語）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項		
授業のテーマ及び到達目標			
この講義では、フランス語圏の絵画、映画、写真、文学などの表象文化作品を通して、次の3つの目標を達成する。（1）表象とは何か （2）フランス語圏の具体的な絵画と文学をとりあげ、それぞれの媒体・記号をとおして表現されている文化事象を検討する （3）絵画と文学の関係性における思想の歴史、あるいは無関係性について議論し、理解することを目指す。			
授業の概要			
この講義では、フランス語圏の絵画、写真および文学などの表象文化作品を題材に、ヨーロッパの表象文化を記号の体系として理解する。まず、絵画の視覚的媒体による表現、文字なる媒体によって表現されていることの違い、あるは共通点を考察する。そしてヨーロッパの絵画史（美術史）を紐解き、その歴史を知ることによって、絵画と文学の関係が歴史的に変化していることを理解し、作品を意味付けする方法を学ぶ。			
授業計画			
第1回：イントロダクション			
第2回：ルネ・マグリット『これはパイプではない』			
第3回：ルネ・マグリット『これはパイプではない』 & ミッシェル・フーコー			
第4回：絵画と文字による表象&ミニテスト			
第5回：ギュスターヴ・モロー『出現』			
第6回：ギュスターヴ・モロー『出現』 & 聖書			
第7回：ギュスターヴ・モロー『出現』 & フロベール『ヘロディアス』			
第8回：ギュスターヴ・モロー『出現』 & オскар・ワイルド『サロメ』			
第9回：ギュスターヴ・モロー『出現』 & ミニテスト			
第10回：クロード・モネ『ルーアン大聖堂』			
第11回：クロード・モネ『ルーアン大聖堂』 & ターナー『ルーアン大聖堂』			
第12回：クロード・モネ『ルーアン大聖堂』 & 写真			
第13回：クロード・モネ『ルーアン大聖堂』 & 装飾			
第14回：学生による表象文化研究のプレゼンテーション			
定期試験は実施しない			
テキスト			
マグリット、モロー、モネの絵画作品			

フロベール『ヘロディアス』in『三つの物語』光文社古典新訳文庫 2018

ワイルド『サロメ』光文社古典新訳文庫 2012

参考書・参考資料等

ミッシェル・フーコー『これはパイプではない』東京・哲学書房 1986

『ギュスターヴ・モローの世界』新人物往来社編 2012

セミール・ゼキ『脳はいかに美を感じるか』日経BPマーケティング 2002

『西洋美術史』秋山聰、田中正之監修、美術出版社 2021 など

学生に対する評価

授業における発言とミニテスト：40% および最終プレゼンテーション：60%